

さばえ近松文学賞2014

～恋話 (KOIBANA)～

受賞作品

◆近松賞

「大阪新町はすかい慕情」

原里佳（大阪府堺市）

◆優秀賞

「人形の伝言」

菅原哲夫（奈良県奈良市）

「シャル ウィー？」

古林邦和（鳥取県倉吉市）

「水底の櫛」

成田えりこ（福井県福井市）

◆佳作

「絢歌をもう一度」 馬来田朋恵 (福井県福井市)

「匠九代娘」 一川夏紀 (東京都世田谷区)

「捨てる女 拾う女」 田中園枝 (東京都国分寺市)

「石田縞恋歌」 後藤利巳 (福井県坂井市)

「帰省」 立野裕太 (福井県福井市)

◆松平昌親賞 学生部門

「レンズの向こう側」 徳永雅 (千葉県松戸市)

◆審査員特別賞 学生部門

「彼と私をツナグもの」

竹澤彩里^{たけざわあやり}

(福井県福井市)

※敬称略

絶品の掌編小説

近松賞に輝いた『大阪新町はすかい慕情』は素晴らしい作品でした。文章、構成、描写、展開……どの点を取り上げても群を抜いていました。この世話物に出合えたことを、選考委員のひとりとして大変喜んでいきます。

他にも優れた作品が何編もありました。現代物でも上手なものに触れることができ、学生作品には初々しさを感じました。

鯖江に関するものを入れるというシバリは足かせにはなりません。小説空間にどう馴染ませるかが問題だけです。とはいうものの、着物、漆器などの伝統工芸品は先例もあるので小説に向いていて、眼鏡はちょっと難しいかもしれませんが、ですが、却って、挑戦しがいがあるというものです。

鯖江の眼鏡の歴史を取り上げることもできます。当地の工房に足を運べば、職人やデザイナーナ



ーにも会えます。製品にこだわらずとも、眼鏡と恋を結びつけて柔らかな話が書けるはずで
県外からの応募者にはハンディがあると思うかもしれませんが、否、否、否。眼鏡に限らず、
初めて目にするものは、地元の人たちよりも新鮮に感じ、作品を産み出す原動力になることは
珍しくありません。駄ジャレを言う気はありませんが、近視眼^{きんしがん}的にならずに、近松賞に新たな
風を送りこんでください。

完成度は高い

近松文学賞の魅力的な作品に共通することは、生き生きとした描写である。

説明より描写で引きつけている。情景描写で大阪や鯖江の街の情景が目には浮かぶ。また、粋な人、味わいのある人物で等、魅力的な人物も登場している。

ストーリー展開もムダがない。巧みな展開に、そういうことがあったかもしれないと思わせてしまう。さらに表現も豊かで、やわらかな感性と文体のリズムがこちよい。是非、今回の質の高い各作品を味わっていただきたい。

受賞作品

講評・特別審査員 藤田宜永さん

総評・審査委員長 林 哲治さん

「大阪新町はすかい慕情」 原 里佳

「人形の伝言」 菅原哲夫

「シャル ウィー？」 古林邦和

「水底の櫛」 成田えりこ

「袖歌をもう一度」 馬来田朋恵

「匠九代娘」 二川夏紀

「捨てる女 拾う女」 田中園枝

「石田縞恋歌」 後藤利巳

「帰省」 立野裕太

「レンズの向こう側」

徳永 雅

「彼と私をツナグもの」

竹澤彩里

近松の里たちまち

※掲載の受賞作品は応募に際し、送られてきた内容をそのまま掲載しており、校正・校閲などの編集は加えておりません。

「大阪新町はすかい慕情」

原 里佳

暑気を吸いこんだ西横堀川が、とろりと流れる昼九ツ、廓の眠気を破る気ぜわしい声が「榎屋」に響いた。

「夏蝶かるといてるかっ」

息せききって走り込んできたのは、道修町は藁種間屋の隠居にして、この見世の天神を鼻根にする小西久平衛である。

常ならば四枚肩の駕籠を仕立てて来るものを、珍しく己の足で駆けて来たものらしく、太り肉の図体からは汗が吹き出している。雨に降られた赤蕪といった顔面を拭きながら、もう片方の手に四角い包みを提げていた。

「ま、旦那さん、小一升ほども汗掻かはって何ごとだす。夏蝶やつたら二階でっせ」

この家の女房が段梯子に目を向ける。

「呼んできてんか。早よ、早よ」

久平衛は勝手尽かてずくに座敷へ上がると、包みをといた。中から清楚な黒塗りの一椀が現れ、辺りの気配をしんと冷ました。

五十路のこの男、夏蝶が顔見世するなり、一目ぞっこんとなり、孫娘の機嫌を取るごとく棧屋へ揚がりはじめて三年になる。

「なんと落ち着いた、行儀のよろしいお椀やこと。いまに奥艶おくつやも出まつしやろな」

久平衛が差し出した椀を両手で包み、夏蝶はそれへ柔らかな目を向けている。きめ細やかなふつくらとした面差しは、薄暗い座敷に生った桃であり、その実いっぱいには張った双眸は清らかに澄んでいる。

「おくつやて何や」

「へえ。使うてるうちに、だんだんと出てくる艶のことだす。わてら鯖江の者もんは、越前塗の一番のあじわいや思てます」

「ほう、そら使うんが楽しみやな」

久平衛は上機嫌に言ったが、夏蝶は椀を見つめるうち、次第に長い睫毛を伏せてゆく。大きく息を吸い、ゆっくりと吐いて気を静めようとする様は、蝶が翅を休める姿に似ている。

「どないした。なんぞ気に障ること言うたか」

「すんまへん。眺めてたら父母のことを思い出しましたんや」

嘘ではなかった。が、父母の顔が浮かんだのは一瞬で、夏蝶を切ない気持ちにさせたのは、

今も腕の底に消えぬ一人の職人の顔だった。

「なんちゅうことあらしまへん」

夏蝶は語尾を釣り上げて、晴れやかな顔を拵えた。

「そうか。なんやしんみりさせてしもたな。その代わり、今度はちよつと趣向の凝らした品持ってくるよつてにな」

と万事こういう具合で、これまで久平衛が夏蝶のために取り寄せた越前漆器は、すでに両手に余る数にのぼっている。女の懐郷を慰めんと張りきって、裏目に出たのはこれが初めてだった。

月の晦日が近づくと、夏蝶は禿（上級遊女の卵）を連れて三津寺詣でに出かけるのが習いとなっていた。ひと月の無事を報告し、翌月の繁盛を祈願する。帰りに門前の飴屋に寄って、朔日の紋日に揚屋に配る蝶形の飴細工を贖う。それが夏蝶にとって、廓暮らしのただ一つの息抜きであった。

その日も、東の大門を出て新町橋を渡ると、景色は映え、心は躍った。見世の若い衆が日傘を差しかけ、番をしいしいついては来るが、廓の外でする呼吸は肺腑に緑の風を送る清々しさがある。禿の足も浮かれ、下駄の音さえ丸く響いた。

参詣を終え、一行が飴屋へ顔を出すと先客があった。菅笠を被り、尻端折りした後ろ姿が目籠に飴を選っている。鶴に亀、大小の魚を模したのや、菊や梅といった花を形どつたものまで、

この店の細工は大人にも人気があった。男は最後に店の奥に取り分けられた、蝶形の飴を指して言った。

「そいつも一つ足してくれないか」

その声に、夏蝶の目は男の背中に吸い寄せられた。

「あいすまんことです、これはお得意さんの特注品でおまして、お売り致しかねます」

詫びる飴屋に夏蝶が口を挟んだ。

「かましまへん。分けたげなはれ」

飴屋が恐れ入ると、男が振り向くのが同時であった。いつとき蟬しぐれがやみ、夏蝶と男の頬を撫でるように風が抜けた。

「しづ……」

吃驚の面もちで、男はうわ言のように夏蝶を呼んだ。

「お久しゅうございます」

女の声にも顫えが混じった。三津寺の利益りやくか、それとも罰ばちか。その昔、行く末を誓い合った二人の眼差しが、潤みを帯びてもつれあっていた。

こましゃくれた禿が、喉が渴いたと機転を利かし、筋向いの水茶屋を指さしている。天神は若い衆も引き連れて、男を門前の茶屋へと促した。

男の名は常吉。夏蝶より四つ歳としかきの二十五で、若い腕のたつ蒔絵職人である。親許の貧苦

を救うため、しづと呼ばれた娘が人買いの手を経て大坂新町へ流れて来たのが五年前。胸の奥深く、とうに消えたはずの埋み火が、二人の胸を焦がしはじめていた。

大坂へは遊山かと尋ねる夏蝶に、常吉は好事家に雇われての「十日奉公」と応えた。蝶を主と際立った意匠の蒔絵を所望され、過分な手間代に路銀まで受け取って、雇い主が住まう大坂へ来たという。

「それで意匠は決まりましたんか」

「いや。筆を持っても一向に浮かばない。手がかりを求めて街へ出てみたが、大坂は蝶とは縁遠い土地のようだ」

常吉は口惜しさをにじませた。

「大坂の蝶はなあ……新町に舞うてますのやで」

うつむいたままの夏蝶がつぶやき、懐から、顔見世のおりに楼主が揚屋に配った名入りの手拭いを取り出した。渡された男の目に蒼白い光が差した。

「故郷を出るとき、常さんの手伝いは一生叶うまいと諦めてましたけど、ここで逢うたが百年目。廓の蝶を描いてはくれはらしまへんか」

幾日でも身揚げりする覚悟はついていた。入費かかりの心配はいらない、と夏蝶は男の手に白い手を重ねた。それから、二人に見とれている禿に、やわらかな、けれど、やや長い視線を送った。

—— よろしいな。賢うしときなさいや。

上目づかいに天神を見た禿は、コクリと顎を引く。茶屋の入り口で待つ若い衆にはもちろんのこと、見世の者にも他言を禁じた姉女郎の目を、利発な禿は瞬時に解したようだった。

その日の宵、常吉は東大門をくぐって、夏蝶に教えられた揚屋に入った。東西随一の派手さを誇る新町の揚屋で、酒宴というには甚だ貧弱な酒盛りをし、「槌屋の夏蝶」と名指しした。

揚屋から槌屋に男衆が走った。見世先で「夏蝶天神お名ざしでございます」と叫んだあとで、男は小声でつけ足した。

「ただし、赤兎の行水でおます」

懐の涼しい客を、鹽たぐいで（足らいで）泣いてる、と洒落で告げたにもかかわらず、夏蝶は「承りました」と丁重に返した。男衆はあんぐりと口を開けたまま帰って行った。

廊中が仰天したのは、それからだった。初会の客を夏蝶は槌屋へ連れ帰り、自室へ迎え入れたばかりか、そのまま居続けさせたのである。槌屋の楼主も香車かりくるまもさぞ熱あつりたつものと思われたが、存外、知らぬ顔を決め込んでいた。

三日たち、五日がたつて、常吉はようやく廊を去った。後朝きんあさは心から涙にくれたが、その後はいつそ夏蝶の心は晴れていた。十日たち、ひと月がたつて、三津寺詣でが巡ってき、その夜、久方ぶりに久平衛が登楼した。

「長い夏風邪でえらい目に遭うた」

と言うものの、その顔は息災そのもの。

知らなかつたとはいえ、見舞いを遣わさずにいた無礼を夏蝶が詫びると、久平衛は「それよりな」と相好を崩した。

「約束どおり、今日はちよつとした品持つて来たんや」

久平衛が包みをとくと漆香が立つた。どこまでも黝く澄んだ鏡台と煙草盆に、蒔絵で蝶が描かれていた。夏蝶は息を呑み、こぼれるような眸で久平衛の面を凝視した。

鏡台には彼岸花で翅を休める蝶が、煙草盆には睡蓮のまわりを舞ういくつもの蝶が描かれていた。

一本いっぽんの翅脈しみからは、妖艶な息づかいが伝わってき、可憐に舞う姿には命湧きあがる悦びが感じられた。まるで蝶の体温を感じとり、指先で鱗粉に触れたかのような描写が活きていた。

「よほど一心に打ちこんだんやろ。それが分かる出来栄えや」

満足な表情の内にも、久平衛はどこか寂しさを隠せない。見つめる夏蝶の唇が顫えた。

いつぞやの夏の盛り、黒塗りの腕に愁いの目を向けた天神に、察するところのあつた久平衛は、鯖江に人を遣わした。そして、心ならずも裂かれたしづと常吉のことを知るや、常吉を大坂に呼び寄せた。槌屋が廓のしきたりを曲げ、一見客の居続けを黙認したのも、五十男の意地から出た計らいであつた。

「趣向というより、ちよつとでんごが過ぎたかいな」

「へえ。もうちよつとで三津寺はんの罰が当たるところでした」

微笑む女の頬に、泪が一筋走り落ちていた。

以来、久平衛は新町遊郭きつての粹客として、「老いらくの 粹か甘いか 恋の味」と囃されつづけた。夏蝶は夏蝶で、年季明けまで三津寺詣でをかかすことなく、奥深い艶を湛えた遊女になったという。

二階の出窓には、いつも人形が置かれていた。

十五年ほど前、古都奈良の小さな設計事務所に私は勤めていた。元々は商家だった建物を改装し一階は事務所兼応接室、二階は製図作業の仕事場にしていった。

一帯は古都の佇まいが漂い、街中とは思えぬほど静かで、路地を挟んで真向かいにある旧家は、二階の一部を洋間にしていた。大きく張り出した出窓は、路地からも塀越しにその一部が見えた。

窓は私が作業する二階の机のちょうど正面、目の高さにあった。ふと設計図を引く手を休めて顔を上げると、視線の先には、窓辺に置かれた人形の顔があった。

いつも置かれているのは素朴な表情をした大きめのこけし人形だった。黒い漆塗りのおかつば髪に、目を閉じた穏やかな白い顔が、浮かび上がるように見えた。

だが、何のはずみか、こけしの代わりに純白のドレスをまとったフランス人形が置かれてい

ることがあり、そんな時は私の心も妙に華やかになった。

その家の女主人は、たまたま外出した折、路地で通りすがりに見かけた印象では、四〇歳前後の細身の女性だった。すれ違いに、軽く会釈を交わした瞬間、どこか人形を思わせる色白の顔立ちが垣間見えたが、すぐに頭を下げ、足早に立ち去った。

ある日、近所から通つて来る女事務員にそれとなく尋ねたら、

「ああ、あの紫乃（しの）さんのことですか。私と同じ、福井の出身で、紫乃さんは鯖江の生まれなんですよ」

「へえー鯖江か……。やっぱりなあ……。あんなに色白なのは雪国育ちだからかな……」

「まあ、まあ、先生つたら、仕事のことしか頭にないと思つたら、しつかり見てはるんですね、フフフ……」

私が興味深そうな表情をしていたのか、事務員はさらに話してくれた。

「同じ地方の出身なのに、私とは違って、ずっと上品で美人ですからね……。何でも地元ではよく知られている漆職人の家のお嬢さんで、縁あって、こちらに嫁がれてきたと聞いてますよ」

「そうか、だからあの漆塗りのこけしなのか……」

「えっ、こけし……ですか？」

「イヤ、何でもないよ……。そういえばあの辺は、確か……越前漆器で有名なところじゃなかったかな……」

「よくご存じですね……、そうそう、そう言えば、結婚式の引き出物も、紫乃さんのご実家で作られた漆器だったんですよ。私の知り合いも式に出たんで、後で見せてもらいましたけどね……」

「ほお……、で、どんな漆器だったのかな」

「それがね先生、蝶々の柄の蒔絵が施されたワイングラスで……とつてもステキでしたよ」

「フーン、蝶々のデザインか……洒落てるね……。ところで、紫乃さんはあんまり外には出ないんだね」

「たまに、着物姿で出かけはるのを、見かけたことはありませんけどね……」

それから、ふと声を落として話を続けた。

「何せ……、紫乃さんは、ちょっとかわいそうな方でしてね……」

彼女の話では、かなり年の離れたご主人は、数年前、脑梗塞で半身不随となり、以来車イス生活を送っていると話してくれた。子供もなく、夫の介護をしながら、年老いた義母と共に、いかにもこの地の旧家の雰囲気が漂う家で暮らしているということだった。

その後、紫乃さんを路地で見かけたのは、ほんの数回だけだったが、彼女が出窓に飾る人形は、毎朝目になっていた。

ある日の午後、私は図面を引く手を休め、作業で疲れた目でぼんやり目の前の人形に視線を

向け、タバコを燻らしていた。その日、紫煙の先には久しぶりに愛くるしいドレス姿の人形があった。つぶらな瞳を大きく見開いて、今にも話かけたそうに、私に微笑んでいた。その瞬間、ふと疑問がわいた。

今日はなぜ、あのこけしではなく、純白のフランス人形なのか。さらに大きな疑問は、なぜ人形の顔はいつも外を向いて置かれているのか。

それまで何も不思議になど思わなかったのに、その日は妙に気にかかった。普通、部屋に飾る人形なら顔を室内に向け、路地側からは後ろ姿が見えるのが自然なはずだった。通行人への目の保養のためにしては、下の通りからは二階の人形の存在は分かつて、その表情はほとんど見えない。それなのにいつも顔が外を向いているのは、どうにも不自然である。あれこれ推測を巡らした。

やはり、外から誰かに見てもらうためにあのように置かれているのではないか。もちろん、私以外の誰かにである。さらに、時々入れ替わる二体の人形にも、それぞれ意味があるのではないかと、思い始めた。

その後、それとなく注意を払い、時々窓越しに路地を見下ろすようになった。

しばらくして、通りかかる人の中に、いつも軒下に身を寄せ、立ち止まっては、出窓に目をやる一人の男性がいるのに気付いた。路地の先にある古い国立の女子大で講師をしているという青年だった。

彼は週に三回、決まった曜日の決まった朝の時間、私の出勤直後に合わせるかのように路地に姿を現した。

小雨の降るある朝など、傘を降ろし身体が濡れるのも構わず出窓を仰ぎ見ていた。青年の丸い黒縁のメガネの奥は、何かを思い詰めているかのように見えた。

それからの私は、出勤後、タバコを吹かしながら外を見下ろしては、鳩時計のように時間どおり姿を現し、窓を見上げる長身の青年を注意して観察するようになった。

やがて、彼が窓辺にこけしを目にした時は、そのまま立ち去るのに、フランス人形の時は、急に表情を変え、顔を上げ、その場を素早く後にするのを、私は見逃さなかった。

推測は次第に確信へと変わった。

おそらく目を閉じて静かに口元を閉じて佇む人形は、青年に告げていたのだ、「私は元気です。でも、今はまだあなたにお目にかかることはできません」とでも……。

一方、明るく微笑み、口元を今にも動かしそうなドレス姿の西洋人形の方は、「今日は外出できません。いつもの所でお待ちください」

そんな内容の秘密の合図なのだろうと思い始めた。

そう確信すると、青年がやってくる曜日の朝は、私もまた、妙に心ときめく思いで、その日の人形と青年の反応を確かめずにはおられなくなり、もはや単なる観察者ではなくなっていた。

数週間もこけしが置かれ続けた後、ある朝、ふいにフランス人形に代わっているのを見た時など、自分の心が高鳴り、一瞬声を漏らすほどだった。

その後、彼女の夫が亡くなるまでの半年間、秘められた二人の伝言のやり取りを、青年と同様の期待と不安の心で確認することとなった。

葬儀はそろそろ夏を迎えようとする季節だった。

その日の朝、私がいつものように見下ろしていると、喪服を着た紫乃さんが出てきた。黒の着物のせいにか色白の顔が一層目立った。

路地を丁寧な箒で掃きながら手桶の水を静かに撒いていると、青年が時間通りに現れた。私は息をひそめてその光景を見降ろしていた。

二人は一瞬目を合わせた。

紫乃さんは初めびつくりしたように、後ろに下がったが、すぐに静かに頭を下げた。男は黙って彼女を見つめていた。私からは二人の表情はよく見えなかったが、青年が何か二言、三言話しかけたらしかった。

彼女は黙って下を向いたままだった。なおも何か言おうとする男に、うつむいた顔をあげ、首を左右に小さく振った。青年は彼女に身を寄せ、その手を握ろうとしたが、紫乃さんとはとつさに後ろに引いて、慌てて木戸から塀の中に戻った。男はしばらくその場に佇んでいた。

その日、昼すぎ、数日前から鳴き始めた蝉の声に混じって、僧侶の唱える低い読経の声と木の単調な音が、付近に響き渡った。いつもの路地の風景とは違い、あわただしい人の出入りが見られる一日だった。

やがて葬儀の風景も一段落し、界限にはまたいつもの静かな空気が戻ってきた。私も普段の仕事に没頭した。だが、顔を上げ、目を外に向けても、もう窓辺に私の心をときめかせる人形が置かれることはなくなっていた。

四十九日を済ませた数日後、紫乃さんが家を引き払い他所に引っ越して行つたと、事務員が話してくれた。

間もなく、私はその建築事務所を辞めて独立した。

男が長身を屈めて店頭の花を選んでいるときから、私にはわかっていた。額は思いのほか広くなっていたし、顎も尖ってきたが、その姿は二十年前の安井くんとびったり重なった。

安井くんはしばらく迷ってからカーネーションを二本抜いて、私に差し出す。渡された赤い花を、うつむいたまま、ラッピングしてリボンをつけていると、急に安井くんが固まったような気がした。気づいたのだ。

カーネーションを渡すとき声がかかるかと思ったが、安井くんはわずかなためらいを残して背を向け、ドアの向こうに消えた。

並べられた花筒の隙間から駅前通りを見やると、安井くんが足をとめるのが見えた。降り返る。曖昧な表情だ。しかしそのままくると回って鯖江駅と反対方向に消えて行った。

安井くんは中二の時の同級生だったが、目立つ男子ではなかった。教室の隅の席で、いつも

映画や写真の雑誌をひっそりと読んでいた。勉強は割とできたほうだが、運動面はからきしダメだった。それでいて悪ガキたちにはたぶられることがなかったのは、簡単に手を出せない何か安井くんにはあつたからだろう。それは、おそらく不器用ながらも自分の道に邁進する強い意思、とでも言うべきものかもしれない。しかし私にとっては、偶然同じ時間を共有したというだけの存在でしかなかった。あの英語の授業がなければ、いま安井くんに気づくことはなかったらう。

安井くんは、それから頻繁に花を買いにきた。花を選んで手渡すとき、聞きもしないのに、母の誕生祝い、と、言い訳して、アマリリスにリボンを求めた。けれど、安井くんがそれ以上何かを口にすることはなかったし、私の名前を呼ぶこともなかった。

私は中学二年の途中から、父の仕事の関係で京都市に転校した。そこで割と早く銀行員と結婚したが五年で離婚し、小さな晴香の手を取って鯖江にもどったのだ。そして駅前のフラワーショップで働いている。給料はわずかなものだが、銀行員のせいかな、養育費は几帳面に送ってくれるので、晴香との生活に何の不足もなかった。

そんな私の日常に、それほど懐かしくもない昔が顔を出したのである。

海が光り始めた。安井くんの花を買う姿は今もぎこちないし、眼も伏せ気味。そのぎこちなさに、私を意識していることが知れたが、それでも同級生としての言葉がかかることはなかった。もちろん英語の授業のことも言い出さない。おそらく忘れているだろう。覚えているのはきつと私だけ。

若い元気な女の先生が「レッツ」を教えたあとで、そのレッツ構文で女子を誘うようにと、男子に指示を出したのだ。女子がそれに答えるという単純な応用練習。そして私は安井くんとペアになった。安井くんは、私に落ち着きない視線を向け、神経質な声で言った。

……Let's go to see the movie together, shall we.

Shall weは習っていないかった。安井くんが自分でくつつけたものだが、映画に行かないかと誘ったときの眼差しに私は真剣なものを見た。

私自身は活発な女子生徒だったが、その活発さの発露の先に安井くんは決していなかった。だから、逆におどおどした必死さが嫌だった。大きな声で振り切るように叫んでしまったのだ。ノオオオー!!!と。

安井くんは顔を真っ赤にして、まるで落ちるようにイスに座った。そしてうつむいた。私も、自分の声の高さにあわてて席につく。小さな笑いは起こったが、先生は何事もなかったみたいに次の人を指した。

安井くんは、何度も花を買いに来たのに、相変らず言葉を交わすことはなかった。私も、お客と店員の関係にすっかり慣れていた。

真夏だった。駅前通りの路面から陽炎が湧いていた。グラジオラスを包む間、安井くんは、聞きもしないのに、初めて自分のことを口にした。町外れの畑で親戚の農業を手伝っている、と。今はトマトの最盛期なのだそう。そして最後に、大都市で暮らすよりはずっと楽しい、と付け加えて笑ったが、それは私の想像から大きく外れていた。

結婚してから一度だけ参加したクラス会で、安井くんが映画の撮影助手をしていると聞いた。グラウンドで遊ぶ時間を惜しむように映画雑誌を読んでいたから、それはすんなり心に落ちた。酔った男たちは、女優と一緒に仕事ができる安井くんを羨ましがったものだ。

何があつたか知らないが、その安井くんが映画の仕事をやめて、今は農業という。私は曖昧に頷いて聞きながら、農業でどれほどの収益を得ることができるのだろう、などと考えていた。花を包みながら失望が心に滲んだ。

夏も終わろうとしていた。

晴香が扱いつらくなってきた。保育園に迎えに行っても、すねて出て来ないこともたびたびだ。最初の頃は、私の姿を見て、まっしぐらに走って来たのに。狭いアパートにもどつても、退屈そう。夕食を作る間も黙ってテレビの子供番組を見ている。テレビで「パパ」が話題に

なると、晴香は私をじっと見つめる。もの言わぬ大きな瞳を受けて、私の背中から夏のぬくもりが消えていく。

爽やかな風の中、安井くんは昼過ぎにやって来て、ふいに鞆から雑誌を取り出した。私でも見たことのあるカメラ雑誌。安井くんが中ほどのページを開く。顔写真がある。写真のコンクールで入賞したのだ。

安井くんがどもるように説明する。

「これ、けっこう大きな賞なんですよ。誰かに自慢したかったんだけど、気がついたらこの町に親しい人がいなくて。それであなたに。すみません」

そういつて、安井くんは雑誌を鞆にもどした。安井くんは、教室の隅で育んでいた思いをまだ捨ててはいなかったのだ。

安井くんは他にも何かいいそうだったが、結局何も言い出せず水菊を手に戻って行った。私はその背中に心うちで祝福の言葉を思い切り投げっていた。

すっかり秋の気配だ。建物の向こうの山々が真っ赤になった。リンドウを買った後、安井くんが目を伏せて言った。

「いつか都合のつくときに、モデルになってもらえないでしょうか。紅葉に包まれたあなたを

撮りたいのです」

嬉しかった。ものすごく好きというわけではないし、寂しさゆえに安井くんを待っていたというのでも、もちろんない。けれど、諦めずに自分の道をゆく姿に少しづつ憧れの視線を向けるようになっていたのは事実だった。私が同意すると、安井くんはかすれた声で、ありがとうと言った。その様子に、安井くんはやっぱり映画現場の騒々しさは向かないだろうな、と感じた。息がしやすいのは、もっと小さなスタジオのようなものだろう。

その夜、私は晴香に童話を四冊読んであげた。

晴れた日、私は安井くんの車で文殊山に出かけた。晴香も連れて行った。空気が美味しかった。

登山道のあちこちで安井くんはいろいろ指示を出した。私はその声の大きさに驚き焦りながら、そして照れながら、安井くんの言うとおりにポーズを取った。晴香は、意外にもおんぶをせがむことなく、腰を下ろして、そんな私たちを楽しそうに見ていた。晴香の写真もたくさん撮ってくれた。晴香は天性のモデルみたいに、小さな木に登ったり、坂道で転んでみせたりした。

カメラを手にした安井くんは生き生きしていた。楽しそうだ。

用意したお弁当を、白山連峰を望む大文殊のベンチに座って食べた。下界からの風が私の髪

を乱し、木々の間を走り回る晴香のスカートをまくりあげた。

水筒のレモン水を飲みながら、安井くんがつぶやくように言った。受賞の関係で知り合った偉いカメラマンからグラビア写真の手伝いを頼まれたのだ、と。そうなれば、東京に出るしかない、と。

私の心を秋風がすつと吹き抜けた。安井くんはもう花を買いに来ることはないのだ。

弁当の後も、安井くんは何枚も私の写真を撮った。私の表情はくすんでいたかもしれない。帰る頃には、晴香はすっかり安井くんに馴染んでいた。安井くんも同じで、拍子抜けするみたいに二人で大笑いしていた。

それから二週間、安井くんは顔を出さなかった。もう東京に行ってしまったのだろうか、と寂しい気持ちになっていた。すると激しい雨の中、まるで雨宿りするみたいに肩を濡らして現れた。スーツ姿だ。

私がタオルで肩を拭こうとすると、安井くんは私の手をそつと下ろして、じっと見つめて息をとめた。そして一語一語はつきり区切つて言った。

「レッツ・ゴー・トゥー・トゥキョウ・トゥギヤザー・シャル・ウィー？」
覚えていたのだ。

私は赤面しながら、あのと時と同じように緊張した顔の安井くんに、心から明るい声で答え

ていた。イエス・レツツ、と。

晴香の笑い声が遠くで聞こえた気がした。

四代将軍徳川家綱のころ、越前の国に吉江という小藩があった。初代藩主松平昌親は、福井藩主の御連枝で、国許では「兵部様」と呼ばれていた。

その兵部様、来年めでたく嫁取りが決まった。婚礼前のこの時期は、身を清く過ごさなければならぬ。若気の至りで女の過ちでも抱えていたら、きれいに清算しておくものだが、兵部の場合それは心配ない。女には優しいが生真面目な性分で、武人は色恋に迷わぬものだと、この若い殿様は固く信じていた。

こたびの参勤もまもなく終わる。兵部は国許にいる乳母と乳人子に土産を買おうと、小間物屋を呼んだ。こうがいと二本選んだ後、その横のつけ櫛に目を留めた。片手に収まるほど小振り、飾り気もない四角い櫛。それは昔、庭石に叩きつけた櫛とよく似ていた。

おなごに櫛を贈るのは、求愛のしるしという。兵部は迷ったが、櫛が手のひらに吸い付くようになっていて、放せなくなってしまう。

国許への道中、懐に忍ばせた櫛の肌をなでながら、乳人子の与津を思った。年頃になっても嫁がずに、与津は側付きの女中になった。兵部は妹のように思っているが、与津が自分に思いを寄せていることは感じている。婚約の知らせを、あれはどう受けとめたのか。

幼少の時、口喧嘩の末に与津が大切にしていた櫛を庭石に投げつけた。そのお返しに、兵部は仰向けに突き倒されて胸を思い切り蹴られた。与津を傷つけた思い出を、近ごろ妙に思い出す。そのたびに蹴られた胸がこつんとうづく。あるとき割ってしまった櫛の代わりに、これを贈ろう。何を今さらと笑うだろうが、与津の笑顔を見られるなら、それでいい。あの朗らかな笑顔を見ると、心が和む。

吉江の御館は福井城下の三里ほど南、文殊山と日野川の間にあった。立藩して十数年、年々家並みも増えていく。兵部は、芽吹き始めた若木のようなこの町を愛していた。

乳母と与津の母娘は、兵部の帰りを待ちかねていた。話題は当然婚礼のことである。嫁は江戸屋敷に住まうので、国許に来ることはない。それゆえ興味津々に、どんな姫かとききたがる。だが問われた兵部も、相手の姫の手柄は、通り一遍のことしか聞いていない。

嫁の話に、与津は穏やかにうなずいている。それが、かえって気にかかる。兵部は話題を変えようと、土産のこうがいを手渡した。武家女は下げ髪を正式とするが、昨今の御殿女中は髪を結い上げて軽やかに働く。

「でも与津は、下げ髪のほうが可愛いな」兵部が漏らした言葉に、与津は顔を上げて黒目がち

の瞳を向けた。目が合った時、兵部は懐の櫛に指をかけたが、道義に厳格な乳母の目前で渡すのは、さすがに気がとがめた。

二人が奥に戻ると、兵部は渡し損ねた櫛を懐紙にくるんで手文庫に入れた。来春までは国許で過ごす。そのうち機会もあるだろう。

江戸で一年、国許で一年、兵部の暮らしはその繰り返しである。与津と過ごすのも一年おきだ。与津は去年よりも華やかになっていた。内から立ちのぼるような色香すら感じる。勤めもときばきと隙がない。その隙のなさに兵部は違和感を感じた。

奥を隔てる杉戸を開けて、与津は時々中奥までやつてくる。その気配がすると、小姓は遠慮して次の間に下がる。庭の池と葉緑を背に廊下にひざまずいた与津は、用件のみを伝えると一礼して立ち上がった。以前なら世間話などして、なかなか帰らなかったのだが。「ちよつと待て」兵部は後を追いかけた。廊下で向かい合くと、与津から甘い香りが漂ってきて、ふわりとめまいを感じた。

「少し根を詰めすぎじゃないのか」

与津は抑えた声で答えた。「いいえ、ご奉公ですから」

目の前の与津が、すつと遠ざかるように見えた。その口から主従を際立たせるような言葉が出るのを初めて聞いた。

「ご奉公か」ため息まじりに言くと、与津は逃げるように奥へ引っ込んでしまった。おうむ返

しに繰り返した言葉が、与津自身を傷つけたように見えた。

与津は、兵部との間に距離を置こうとしている。幼なじみの心安さはあるが、分をわきまえた女だった。ふと、二つに割れた櫛を握り締めて泣いている少女の面影が浮かんで消えた。兵部の胸の奥から、ひな鳥が殻をつつくようなうずきが伝わってきた。

与津と向かい合えたのは、里山がほのかに色づき始めたころだった。奥の間に入ってきた与津は、山吹色の地に釣瓶井戸と秋草をあしらった小袖をまとうている。近年の流行で、謡曲の主題を意匠に取り入れた小袖があると聞くが、これは『井筒』ではないのか。

「その小袖は」と言いかけて、兵部は口ごもった。それは幼なじみが恋に落ちて、夫婦になる物語である。相愛の夫に先立たれた妻は、井戸の水面に映る我が身に、夫の面影を見て懐かしむ。そんな生涯をかけた一途な恋が、与津の望みだと伝えたいのか。だが、それを言葉で指摘するのは無粋というものだろう。「よく似合っているよ」無難な褒め言葉に、与津は恥らいながら兵部の前に座った。

「来年の今ごろは、御婚禮ですね」他人事のような与津の声が、兵部をちくりと刺した。

「祝ってくれるのか」兵部は意地悪くきいた。

与津は、静かにうなずいた。夕映えが色あせて、闇が濃くなった。

「兵部様は、あまり楽しくなさそうですね」

今度は与津が意地悪く言う。

「そんなことはない」声を荒げたが、与津らしい物言いが内心うれしい。

与津はくすりと笑って、「兵部様は昔と変わりませんね、若竹のようにまつすぐで」

「当然だ。武士とは、まつすぐなものだ」

「それに比べると私は迷ってばかり」独りごちるように言うと、与津は居住まいを正した。

「でも、兵部様の幸福を願う心に迷いはありません。奥方様と仲むつまじく、末永くお幸せになられませ」

揺らぎのない優しい声だった。夕闇の中で与津の潤んだ瞳が水鏡のように光った時、無尽にあふれくる愛しさと、与津を抱き締めたいたいという激情が突き上げ、兵部はうろたえた。

恋を封印しようとする和津の姿。それは鏡に映るが如く兵部自身の姿ではなかったのか。

それから数日、否定し切れぬ思いにさいなまれた兵部は、手文庫から紙にくるんだままの櫛をつかみ出した。胸底から熱い塊のようなものがこみ上げてくる。なぜ、こんなものを買ってしまったのか。下心の言い訳に、思い出話を持ち出した卑怯な自分が許せない。

兵部は、いらいらと立ち上がった。庭側の障子を開け放つと、かすかに雨のにおいがした。

櫛を持つ手が熱くしびれた。それでも迷いを振り切るように、池に向かって力任せに投げつけた。櫛は勢いよく飛んで、兵部の秘めた思いとともに水底深く沈むはずだった。

だが兵部が投げたのは、櫛をくるりと巻いていた懐紙だけだった。もぬけの殻となった小さな白い紙切れが、風にもてあそばれ飛び去るのを、兵部は呆然と見送った。

櫛は、足元の畳の上に転がっていた。

愚かな……兵部は力なく座り込むと、櫛を拾い上げた。与津への恋情を否定したかったのではない。意識することさえはばかられる本心の声。それは我知らず口からこぼれ出た。

嫁はいらない、与津だけでいい。

やにわに激しさを増した雨音が、兵部の言葉をかき消した。

年が明けると、家中の侍や町人がこぞって年賀にやって来る。今年は婚礼を控えているので、祝賀の言葉も格別なものとなった。兵部は、穏やかな笑顔でそれにこたえた。

年頭行事が一段落した日の早朝、兵部は杉戸をそっと開けた。障子の陰から奥の間をのぞくと、床の間に紅梅の枝を生けている与津の後ろ姿が見えた。黒髪をきりつと結び上げて、青無地の小袖もさわやかだ。

気配を感じた与津が振り向くと、兵部はすつと歩み寄り、結び上げた髪と前髪の間に、ぐいつと櫛を挿し込んだ。与津は顔をしかめて小さく叫ぶと、櫛を探り当てて引き抜いた。その目がとまどうように兵部を見上げた。

用意した言葉が何ひとつ出でこない。だが、思いは染み入るように与津へと伝わった。

与津は顔を染めて、「兵部様は、こういうことはなさらぬと思っております」

「色恋には迷いたくない。ゆえに、致す以上は真摯に取り組もうと思う」

与津は呆れたようにほほ笑むと、櫛を見つけて寂しげに言った。「でも、御婚札間近にこれは、やはり許されぬことですよね」

たとえ許されても、二人が美しいかたちで結ばれることはない。めでたしと終らぬ未完の恋の行く末を思えば、素直には喜べまい。

兵部は、櫛を持つ与津の手を優しく握った。「大名に生まれたために背は向けぬが、建前ばかりでは己れを見失ってしまう。だから、おまえの前では素のままでもいいさせてほしい」

「素のまま、というのは」

「ああ、むかし寝小便を垂れた時のような情けない顔を、思う存分さらしてやる」

ぱつとはじけるように与津が笑った。その笑顔のまぶしさに、兵部は目を細めた。

「そんなものは、ほかの誰にも見せられん。だから、これもそつとしまっておいてくれ」

早春の海を思わせる与津の青い小袖。兵部の手はその襟元から懐の深みへと、小さな櫛を沈めていった。同時にささやいた武骨な愛の一言は、与津の耳にかろうじて届いた。

後に、兄の跡をうけて福井藩主となった兵部は、晩年に一幅の肖像を残している。その峻厳な面差しには怒気さえ感じられて、見る者を威圧する。そんな武張った男の奥底にひそむ童のような可愛さに触れれば、女はそれに寄り添い、慈しみたいと思うものである。

さよ子おばあちゃんのような、素敵な恋がしたい。

私が一度は廃れた石田縞を復活させたいと思ったのは、そんな気持ちからだった。

石田縞とは、縦縞模様の織物だ。女学生の間では「学校縞」と呼ばれて、人気だったとか。

明治、大正にかけて、流行の最先端だった。機を織れない娘は、嫁のとりてもない、と言われるほど、娘さんたちはみんな石田縞を織っていた。

♪二反織りやよいのに三反織って

あとの一反は殿ごへ進上

当時、娘さんたちは、こんな紬歌つとぎょをうたいながら、ガチャコン、ガチャコンと、機を織っていたそうだ。

恋しい人を想いながら。

祖母も、もちろん、祖父のために心を込めて機を織っていた。

そんな石田縞も、戦争によって、廃れてしまったのだ。戦争というのは、人々の暮らしも、気持ちも、生活のすべてを、大きく変えてしまうものだった。

今は亡き祖母もまた、戦争で大切なものをたくさん失くした一人であった。

「お母さん。さよ子おばあちゃんて、幸せだったのかなあ。戦後、お母さんを女手一つで育て、苦勞が多かったんだらうね」

私は、祖母の遺品の整理を手伝いながら、母に訊ねた。

「そうねえ。大変なことが、たくさんあった人生だったと思うわ。でもね沙織、最後よければ全てよし、とも言うじやない」

母は、祖母の大切にしていた石田縞のハンカチをたたみながら、笑って言った。

昭和十六年年、戦争が始まって間もない頃、私の祖母、さよ子と、祖父、晋吉は、恋愛結婚をして、赤ん坊を授かっていた。それが、私の母、つむみ 緋美。

「つむちゃん、ほくら、お父様がお勤めに行かれますよ。一緒にお見送りしましょうね」

「緋美は本当にかわいいなあ。そんな笑顔で見送られると、お勤めが嫌になっちゃいますよ」

「それは困りましたねえ、うふふ」

「さて、そろそろ時間だな。いってきます」

「はい。いつらっしやいませ」

絵にかいたような、幸せな家族だった。

晋吉は絹織物工場で、機械の管理の仕事をしていた。さよ子も、以前は同じ工場で機を織っていた。ここで二人は出会った。

当時、機械で織られた絹の需要が高まっていたが、さよ子は、昔ながらの手作業での機織りが好きだった。

袖歌をうたいながら、丁寧に自分の手で織り上げていくと、出来上がった反物が、まるで我が子のように愛おしく感じたのであろう。

未来の夫を夢見ながら、さよ子はいつも機を織っていた。その幸せそうな表情に、晋吉は心惹かれて、結婚を申し込んだ。

工場を辞めた後も、さよ子は家で石田縞を織っていた。織ることが好きなのだ。

♪二反織りやよいのに三反織って

あとの一反は晋吉さんへ進上

さよ子は、毎日が幸せだった。

昭和十九年、年が明けたばかりだというのに、晋吉に『赤紙』がきた。兵隊として召集されたのだ。戦争は激化していた。

幸せな日々は、突然奪われた。でも、落ち込んでなんかいられない。

「さよ子、袖美をしつかり守ってくれ。ぼくは、国を、お前たちを守る」

「はい……。晋吉さん、これ」

さよ子が差し出したのは、千人針を施した、石田縞の弾除けの布だった。その布には、さよ子と紬美の名前が、小さく刺繍されている。

「ありがとう」

晋吉は、これを腹に巻いて、出征した。

紬美はなぜか、その光景だけは、鮮明に覚えていた。紫と黒の糸で機を織る母の姿、その布を腹に巻く父の姿が、とても物悲しく、凜と美しく、心を打たれたのかもしれない。

昭和二十年、夏。紬美は五つになっていた。

「父様、今はどこにいらっしゃるのかしら」

「紬美、父様は、どこにいてもあなたのことを思ってくれているわよ」

「わたしも、父様をお守りしているのよね」

「そうよ。母様と紬美の気持ちだが、父様のお腹をぎゅーつと抱きしめて、守ってるの」

「母様、そんなにぎゅーつとしたら、父様が苦しいっておっしゃるわよ」

「紬美は、おぼろげな記憶の中の晋吉を思いながら笑った。

「それもそうね、ふふふ」

「さよ子も一緒に笑った。」

しかし、心は、不安でいっぱいだった。もう一年も、晋吉から何の連絡もないのだ。

知らせがないのは、元気な証、と、自分に言い聞かせるように、さよ子は紬美のために、笑って過ごした。

しかし、その笑顔さえも福井の大空襲を目の当たりにして、もうすっかり消えていた。昭和二十年、七月のことだった。

福井の街が襲撃されている。

空はどこまでも赤く燃え、頭上を戦闘機がゴオゴオと音を立てて飛んでいく。

「晋吉さん、私、きつと紬美を立派に育てます。だから、ずっと見守っていてくださいね」
さよ子は、紬美の手をギュッと握って、強く生きることが心に決めた。

戦争が終わっても、晋吉が帰ってくることはなかった。戦後の混乱の中、行方不明者や、身元不明者なんて、珍しくなかった。

祖父は戦争で亡くなったと、母も私も、祖母から聞いていた。祖母は、祖父に渡した千人針の布の余りでハンカチを作って、ずっと大切に持っていた。ハンカチには、晋吉と、小さく刺繍されている。

「さよ子おばあちゃん、おじいちゃんのこと、愛してたんだね。だから、奇跡の再会を果たせた」

「ほんとにねえ。でも、沙織、あなたのおかげでもあるわ」

母は、ハンカチを大事そうになでた。

私は、祖母が大好きだった。歳をとり涙もろくなつた祖母は、毎日歌をうたつて涙ぐんでいた。

♪二反織りやよいのに三反織つて

あとの一反は晋吉さんへ進上

もうボロボロになつた、石田縞のハンカチを握りしめて、こぼれる涙を拭こうともせず、うたつていた。

私は、少しでも元気を出してもらいたくて、今はもう、廃れてしまった石田織を、復活させることはできないかと、試行錯誤していた。

機を織る、織り機も当時の形のまま残つてはいなかったし、石田縞の反物も、なかなかみつからなかった。私は、インターネットで、石田縞を紹介し、反物探しを始めた。

それが功を奏して、ある日、一通のメールが届いた。

私は、岐阜県に住む高島といいます。

沙織さんの書き込みを見て、驚きました。探しているものが、家の祖父の持っている物、そのものなんです。写真添付してあるので、見てみてください。もしよければ、一度、実際に見に来ていただいてもいいですよ。

住所、書いておきます。 高島 糸江

私は、ドキドキしながら、添付された写真を開いてみた。

「あつ！ おんなじ……」

祖母のハンカチと全く同じ縞の、一枚の布。

そして、この写真の送り主の名前が私と同じ『高島』なのだ。これはもう、間違いない、祖母のものなんだと、確信した。

祖母はこの時、八十一歳。心臓を患っていて、もう長くはないだろうと、余命宣告されていた。

祖母の恋を、諦めたままにしてほしくない。

私は、居ても立ってもいられなくなり、祖母のハンカチを握りしめて、岐阜の高島さんに会い、車を飛ばした。

そして、家の表札を見て、本当に来てよかったと、思った。

表札には、高島晋吉と、書かれていたのだ。

祖父は、戦争で負傷して、記憶も曖昧になっていたそうだ。自分の住んでいたところが思い出せずにいたが、石田縞の布を腹に巻いていたのを、偶然、岐阜の人が見つけて、ここに帰ることになったらしい。なぜ鯖江ではなかったのかというと、実は、石田縞は岐阜から伝わった文化だったのだ。

岐阜で身寄りのない祖父は、ここで結婚し、暮らしてきたというわけだった。

祖父の記憶は曖昧だったが、私が絢歌をうたつて聞かせると、

「さよ子……。絢美……」

と、つぶやいて、ぽろぽろと涙をこぼした。

「おじいちゃん、時々その歌をうたつて、この布を眺めてました。何かあるとはおもっていましたが、まさかそんな事情があつたなんて」
と、メールをくれた糸江さん。

「あの、一つお願いがあるんです。晋吉さん、私の祖母に、会っていただけませんか？」

私は、これが最後のチャンスだということを話した。晋吉さんと岐阜の高島さん一家は、快く鯖江に来てくれることになった。

「さよ子、ずいぶん待たせてしまったね。絢美もこんなに立派になって」

「父様……。お帰りなさい、おとうさん！」

母はまるで子供の様に泣いた。

そして、さよ子おばあちゃんは、うたつた。

♪二反織りやよいのに三反織つて

あとの一反は晋吉さんへ進上

もう一度、絢歌を、愛しい人のために歌うことができたさよ子おばあちゃん。

私もいつか、こんな恋をしてみたい。
もちろん、ハッピーエンドの恋を。

削りたての木屑の匂いに満ちた作業場の中、窓から密色に染まった光が射し込み、薫の手元を明るく照らした。薫は手元の椀を手の中で転がし、陽光に美しく煌めく曲線を見ると、自然と笑みがこぼれた。今までで最高の出来かもしれない。刷毛に漆を取ると、その甘くて渋い香りがむっと立ち上がる。薫は、はやる心を抑えて、刷毛にとった漆を、慎重に、だが素早く、すっすつと伸ばしていく。自分の思った通りの軌道を刷毛が滑る快感は、他で感じた事のないものだ。夢中で手を動かしていると、隣で見つめていた徹さんが、喉を鳴らして唸った。

「初めてのの上塗りだなんて、信じられないな」

薫は振り返り、片眉を上げて笑った。

江戸は元禄十五年創業、天海屋は父で八代目になる鯖江の中でも古い漆器の店だ。機械化、大量生産化が進む中、職人の手で作る昔ながらのやり方で、蒔絵や装飾の美しい食器を多く生

み出してきた。昔は十数人いたという職人も、今は父と清さん、その息子で薫の九つ上の徹さんの三人だけだ。表に店を構え、裏には作業場と、薫と父が住む住居が並ぶ。

「この鯖味噌、美味しいな」

静かな夕食の途中、父が呟く。

「おかみさんの味に似てますね」

清さんが薫に笑いかける。

「優子の味は知らないのに、不思議だな」

母は、薫を産んだちようど二週間後に亡くなったそうだ。清さんについて来ていた徹さんが赤ん坊の頃から薫の面倒を見てくれ、徹さんに育てられたようなものだ、父に聞かされている。薫は今年、高校生になった。

「そういえば、こないだ卸した旅館で徹の作った椀の評判が良かったぞ」

黙って頭を下げる徹さんの隣で、清さんが嬉しそうに笑う。

「徹も弟子入りして十年ですか。おやっさんに鍛えられてちつとはマシになったようぞ」

「最初から筋は良かったんだ。うちに婿に来て継いでくれないもんかと、お前ともよく話したもんだが……」

清さんと徹さんの顔がさつとくもり、気まずい空気が流れた。薫はうつむいたまま、お味噌汁の入った椀の模様を眺めていた。美しい蒔絵で描かれた梅の花の模様。徹さんが初めて仕上

げた腕を薫にくれたものだ。

「薫ちゃんほどの美人なら、いい婿がわんさか来ますよ」

空気を交えようとしたのか、清さんが明るい声で言った。

「わんさかつて、一人でいいよ」

父が苦笑する。

「でも、この鯖江ではどンドン職人が減っちゃまつてるからなあ」

「やっさんも、病気とはいえ、辞めちまいましたからね……」

二人は底の昏い目でお互いを見た。

徹さんは視線を落としたまま、黙々と夕飯を食べている。薫は寂しさなのか何なのか、よくわからない胸の痛みを感じて、目をそらした。コト、とお腕を置く音がした。

「薫ちゃん……お嬢さんは、最近塗りも始めましたが、俺なんかより筋がいいです。今日、初めて上塗りをやっただんですが、いい出来です。蒔絵のアイディアも新しいし……」

薫が目を上げると、父と清さんが眉を上げて薫を見ていた。その目には驚いたような、そして嬉しそうな光が浮かんでいる。

薫はこの作業場で育った。邪魔をしないように隅に座り、父や清さんの仕事を見てきた。見よう見まねで遊んでいたものが、確かに技術となって薫に受け継がれているのだ。

「確かに。俺もちよくちよく見ていましたけど、薫ちゃんは相当器用ですよ、おやっさん。才

能があるといっている」

「……しかしなあ。娘だから、九代目とは」

困り顔の父。薫は女だから、と思ったことはないが、九代目は徹さんがいいと思っていた……数日前まで。いつも父と清さんが婿入りの話ばかりしていたので薫もそうなると思っていた。しかし突然、徹さんが父と薫に頭を下げて、誰か別の人と結婚すること、職人として独立したいこと、を告げたのだった。

翌朝、朝食と朝の作業を終えると、薫は急いで家を出た。昨日徹さんに褒められたのが嬉しくて、作業中、時間を忘れて塗りに没頭してしまったのだ。時計を見ると授業開始の時間。一時限目は諦めて歩くことにした。

「薫ー！」

突然の声に振り返ると、幼馴染みの巽が追ってきていた。こちらは昔から天海屋が食器を卸している、同じく江戸時代より続く小料理屋『白石』の八代目候補の長男である。

「どうした？ 珍しい。薫が遅刻なんて」

「……早く完成させたい腕があつて」

巽は尋ねてきたくせに興味がないのか、「ふーん」とそっぽを向いている。

「巽はさあ、もちろん継ぐんでしょ？ お店」

「んー俺？ あんま決めてない」

そんなはずはない。巽も子供の頃から仕込まれていて、中学の調理実習には見事な柳刃包丁を持参して『白石』の名に恥じない腕を振るつたのは、この鯖江の町では有名な話だ。

「そっちは？ やっぱ徹さんが継ぐの？」

目をそらしたまま、巽が聞いてくる。薫は痛いところをつかれて、一瞬、息が止まった。

「徹さんは……独立するんだって。結婚して」

自分で言葉にすると、現実味をもって胸に迫ってくる。鼻がつんとしたと思うと、視界がぼやけてきて、薫は思わず顔を伏せた。

「へ？ そーなんだ。俺はてっきり……」

巽は察したのか、途中で言葉を切った。

「……ずっと周りから言われてたもんな。徹さんが婿入りすれば天海屋は安泰だって」

巽はそれ以上は続けず、黙って歩いていった。学校に着き、薫が「それじゃ……」と言って別れようとする、そつと腕をつかまれた。

「さっきの話……」

言いづらそうに下を向いていたが、巽は突然顔を上げ、唇の片端を上げてニヤリとした。

「ま、俺としては、ほつとしている」

薫はぼかんと口を開けて、手をひらひらさせて去って行く幼馴染みを眺めていた。

放課後、家に帰り、夕飯の下ごしらえをして、作業場の上って行った。父と清さん、徹さんが難しい顔をしているのが見え、足を止める。三人は何かをじっと見つめていた。

階段を一段、そっと上り、その視線の先の物が、自分が昨日上塗りをした椀だということに気づいて、薫は息を飲んだ。

「本当に、薫が最初からやったのか？」

「はい。俺は全く手を貸していません」

徹さんが頷くと、父と清さんが目を合わせた。その様子に、薫は全身が熱くなるのを感じた。自分の作った物が、一流の職人の目にも通じている。その時、昨日の父の言葉が蘇った。……しかしなあ。娘だから、九代目とは。自分は漆器が好きだ。職人の婿を迎えて、家事や育児に追われて生きるよりも、木と向き合い、漆を使い、刷毛を滑らす方がいい。そうやって生きていきたい。

「お父さん！」

思わず、大きな声が出ていた。

「私……お父さんの跡、継ぎたい。料理とか家事も好きだけど、それより漆器が好き」

三人は驚いて薫を見ていた。上気した父の頬。その目は椀と薫を交互に見ていた。

「お前って奴は……仕方がねえな」

苦笑した父の目の優しげな光は、薫を誇ってくれているようにも見えた。

数日後、薫は父に、塗りの終わった椀に、自分の考えた蒔絵を入れてみる、と言われ、作業台の前で考えていた。あと一ヶ月もしないうちに、徹さんは出ていく。自分で作った最初の漆器を薫へのプレゼントにしてくれた徹さん。きつと恋愛ではなかったけれど、兄のような、温かい愛情をいつも感じていた。

薫は深く息をすると、スツと、小さな、それでいて鋭く、勢いのある若葉を描き始めた。

絵を入れた後、夕飯まで時間があつたので、薫は外に出た。西日が辺りを橙に染めている。

その時、後ろから聞き慣れた声が聞こえ、自転車に乗った巽が薫の横で止まった。出前後なのか、軽そうに岡持を振っている。

「この時間、作業中じゃないのか？」

眉を上げる巽に、薫は笑った。

「完成したの。初めて、一人で作ったお椀」

「おお……そうか。おめでとう」

「うん、なんかスツキリした」

大きく伸びをすると、巽が眉根を寄せて、薫を見ていた。

「あ、跡継ぎ問題って……どうなった？」

薫は右腕を叩いて、にっと笑った。

「八代目、我が父親の目を、納得させました」

「え……？」

目と口を開いた巽に、薫は笑った。

「私が継ぐの。天海屋の九代目は、私」

「ええええええ！」

巽の、思わぬ動揺に薫は目を見開く。

「あ、跡を継ぐ？ それじゃあ、俺んとこに嫁に来れないじゃないか！」

……え？

巽は悲壮な顔で、頭を抱えた。

「そんなの駄目だ！ 俺が天海屋の九代目になる。親父には悪いけど、一流の越前漆器の職人になって婿入りする。おお、これだ！」

奇想天外な言葉に、思わず笑ってしまった。

「白石の跡取りがそんなこと言ったら、おじさん泣くよ」

「弟がいるから大丈夫。俺より器用なんだ」

必死で弁解する巽の言葉を、薫は遮った。

「ダメだよ。それに、漆器なめんなよ？」

眉を八の字にする巽を見てみると、なにか胸に温かいものが広がるのを感じた。

「店の九代目は私。白石の八代目もあんた」

「え？　じゃあどうやって結婚すんだよ」

「知らんわ！」

すると巽が、ぽんと手を打った。

「ああ、合併すればいいんだ！」

「そんなこと、できるわけないでしょ！」

情けない顔をする巽を見ながら薫は、次のお椀は白石の家紋である銀杏の葉にしよう。そしてこの幼馴染みの名前を崩し模様にし、背景にしよう、そう考えながら、微笑んだ。

「凄い人出ですね、先生」

並んで歩いていた亜由美が肩をすくめるように笑った。ピンクのブラウスに、ふわふわした髪、女子大生のように見えるが三十歳間近の人妻だ。タロット占いをやっている私と依頼人の彼女は、もう長いつき合いになる。

「流石にこのシーズンだとね」

西山公園の桜は今が盛りだ。平日の早朝だが、かなりの人がそぞろ歩いていて、とても腰を落ち着けて占いをするのは無理だ。

フリーの占い師にとって、占い場所の確保は頭の痛い問題だ。依頼人がリピーターの場合、相手の自宅に伺ったり、自分のマンションに来てもらうこともあるが、そこまでの関係でない場合は、外で占うのが基本だ。

占星術や四柱推命のように個人情報伝える必要はなく、手相のように触れ合う必要もない

から、タロット占いは気軽にできるのが利点だが、それだけに、ふらっとやって来て占いを求め、ふらっと去って行く客が多い。そんな相手を自分のテリトリーに入れる危険は冒せない。では外で占おうと言っても、路上での占いは警察やら反社会的勢力やらいっ横槍が入るかかわからない。喫茶店では嫌な顔をされることが多いし、何よりも、鑑定料プラス飲食代となると、客は割高感を覚えてしまう。

それで私がよく利用するのが、駅からのアクセスがそこそこ良くて、自宅からも徒歩圏内の西山公園だった。雨が降らず風も強くないことが絶対条件だったけれど、「自然と一体になる」感じが客には受ける。

もちろん込み合っている日中にベンチやテーブルを占領するような真似はしない。人のほんどいない、早朝や黄昏時を選んで私はカードを広げた。

メールで鑑定依頼を受けると、客とは公園の入り口で待ち合わせをして、相談内容の聞き取りをしながら、適当なスペースを探すのだ。最悪、折りたたみ式のローテーブルを持っているから広場で占うという手もある。

日本庭園のあずまやで、花見がてら占いをすると思っただけれど、今日はとても無理そうだ。

「仕方ない。ランタン亭に行きましようか」

老舗のコーヒー店は私がキープしている喫茶店の一つだ。コーヒー一杯八百円はするのと、店主の道楽でやっているような店だからたいいは閑古鳥が鳴いていて、静かな声でしゃべっ

ている分にはカードを広げていても、店主や客から咎められたことはない。値段だけが問題なのだが、亜由美は裕福な奥様で、そこを利用するたびに私の飲み物代までまとめて、あっさり払ってくれる。

ランタン亭に腰を落ち着けると、亜由美はモーニングセットを、私はカフェオレを頼んだ。

注文した品が出てくるまでたっぷり十五分はかかるのも、この店の良い点だ。私は早速カードを取り出した。シャッフルしながら占う内容を聞くと、亜由美はふうつとため息をついた。

「最近、夫と上手くいかないんですよ」

私はカットしたカードを一枚めくった。

ワンオラクル、一枚のカードのみから占う方法は初心者向けと思われがちだが、問題の本質を読み取るには適している。むしろ、一枚だけのカードから正確にリーディングするのは経験があつてこそだ。タロットカードはそれぞれに象徴的な絵柄があるから、数枚のカードを展開する方法だと、誰でもそれらしいストーリーを作ってしまうのだ。カードのつまみ食いをすれば、いくらでも、都合の良い解釈を組み立てることはできる。

でもワンオラクルは、ごまかしが効かない。だから、様々なスプレッドを用いる時でも、私は必ずここからスタートするのだ。

出たカードは「悪魔」だった。

左手にたいまつを持った悪魔と、鎖でつながられた男女。不気味な絵柄で、好まれるカード

ではない。

でも亜由美は言った。

「このカード、初めて占ってもらった時にも出ましたよね」

そう。あれは三年前だった。初めて亜由美と出会った時、彼女は腰掛のつもりで入った会社で重要なポジションを任せられるようになり、転職しようかと迷っていたのだ。

「束縛された状態。鎖を断ち切るべきだ。あの時、そう言われて、会社を辞めて正解でした」

亜由美の会社は彼女が退職した直後に、大規模な不正が見つかり倒産に追い込まれた。派遣社員になった亜由美は派遣先の会社で社長に見初められ結婚した。絵に描いたような玉の輿だ。

「このカードが出たと言うことは、離婚した方がいいのかしら？」

私は、それに即答はしない。

「ご主人と上手くいかないことに、何か心当たりか、きつかけは？」

水を向けると、亜由美はぼつぼつと話し出した。

結婚後、なかなか子どもできず、仕事も辞めてしまったから、暇をもてあました亜由美は、マンションのお隣に住む奥様に誘われて、とあるセミナーに行ったのだ。既に流行が過ぎた感もあるが、捨てまくって身の回りも心もスッキリさせようという、あれだ。

「私実践してみても凄く良かったから、主人が溜め込んでいるガラクタを整理してあげたんです。そうしたら思い出の品だったからって怒ってしまつて」

私には亜由美の家の様子が手に取るようにわかった。彼女は深く考えることが苦手だ。占いに嵌っていることもそうだが、人の影響を受けやすいのだ。脆く、愚かで、それだけにある種の男女から見ると、たまらない魅力を持つ女性だ。

きつと捨てることの哲学など何もなく、ただ闇雲に捨てまくり、ひと時の開放感を味わっているのだろう。こういうタイプは、すぐに後悔する。何故、大切なアレを捨ててしまったのかと。そしてまた、他人の品物を勝手に捨ててトラブルを起こすのも、亜由美のようなタイプだ。

「物に執着しない」そのことに執着している自分に、彼女は気づいてはいない。

私は「悪魔」のカードを示した。

「このカード、良く見てね。この男女は鎖で捕えられているけれど、きつく縛められているわけじゃない。抜け出そうとすれば抜け出せるの。表情も苦しんでいるようではないでしょう？ 捕えられた現状に満足してしまっている。問題はそこにあるのね」

ゆつくりと言葉を綴る。亜由美の心に甘い毒の矢を打ち込むように。

「……良く考えて見ます」

そこにモーニングセットが運ばれてきたので、私はひとまずカードをしまった。ゆつくりお茶を楽しんだ後は、たわいないおしゃべりをしながら、様々なスプレッドを用いて亜由美の相談に乗ってやる。観葉植物の手入れ方法、義母への母の日の贈り物は何が良いか、パンプスを新調したいけれどデパートと専門店とどちらが良いか。どうしても良いような迷いにも、丁寧に

答えるのがコツだ。

結局、喫茶店には三時間も滞在した。鑑定料と二人分の飲食代で、一万円以上の出費となったが、亜由美はすつきりした顔で帰って行った。

次に亜由美に呼び出されたのは、桜がすっかり散った頃だった。夕暮れの西山公園で待ち合わせ、今日は閑散としていた日本庭園に寄った。空気はしっとり雨の気配を含み、四月とは思えないほど肌寒い。

「別れたんです、私」

ベンチに座った亜由美がぼつんと言った。

「捨てる快感って言うのかしら、物がなくなるのが楽しくて、ドンドン捨てて。そのうち、文句を言う夫も捨ててしまったらさっぱりするかと思って」

夕闇の中で、亜由美の顔はふいに泣き出しそうに歪んだ。

「捨ててやろうかと思ったのに……離婚届を差し出したら、あの人はあっさり受け取って、むしろ私のほうが捨てられたみたい」

ふうつと息をついて、亜由美はベンチに背を預けた。

「マンシオンは私がもらったけれど、何だか、空っぽなんですよ」

物を捨ててカラッポになったマンシオン。思い出を捨て、人間関係を捨て、もう亜由美には

何も残されていない。幼子のように寄る辺をなくした彼女が最後に私の所に来るのはわかって
いた。そうなるように仕向けたのだから。

「それなら今日は、亜由美さんのうちで占いしましょうか」

「え？」

「時間も人の目も気にせず占えるし」

亜由美のマンションは億に近い価格がつく高級マンションで、彼女の部屋はルーファルコニ
ー付の最上階、四LDKと聞いたことがある。立地も抜群、占いサロンにはびつたりだ。

「良いんですか？」

亜由美は顔を輝かせた。

「嬉しいな。私、張り切ってご馳走作っちゃいます」

愛くるしい尻尾を振る小型犬のように、亜由美は続けた。

「良かったら泊まっていてくださいね」

「じゃあ、行きましょうか」

私が手を差し出すと、おずおずと、でも嬉しそうに亜由美が腕を絡めてきた。悪魔が握る鎖
がジャラリと音を立てた。

さあ、可愛い人を手に入れた。ずっと、この時を待っていたのだ。もう離してはやらない。

安政五年（一八五八） 七月

裏庭の道沿いに一尺半ほどの小川が流れている。梅雨は明けたのだろうか、陽が高く小波はめいっばいにその光を浴びてキラキラと煌めいていた。

藍玉で染めた木綿の総糸を水に晒す私。

チャボン、その様子を横で見っていた蛙が川へ飛び込んだ。ザッ、ザッ、ザッ……、草履が小石を擦る音が聞こえた。

「こりやだめですなあ。石だらけですよ」

藩のお役人だろうか、お侍さんが二人こちらに近づいてくる。水晒しを続けていると、草履の音は私の前で止まった。

「もし、あれは出水の跡か」

そのうちの一人が腰を落とした。日野川沿いの苗の植わっていない田を見て言っているようだ。百姓娘の私は顔を上げることができなかった。

「そうです」

ひと月ほど前にも大雨で川が暴れて田んぼに川石や木屑などが大量に打ち上げられた。村総出で取り除いても、川土が積もり、稲は育たない。一帯は苗が植えられずにいた。

「やはりそうか……、ん、何をしている？」

「藍染めした木綿の糸を晒しています」

「おおそうか、これが石田縞になるのか。昨今この辺りで盛んに織っているそうだな」

「……………」

「それにしても、そなた、ものを訊ねられたら顔を上げなさい。いらぬ遠慮は却って無礼に当たるぞ、ん？」

無意識に身構えた。直後、顎に指がかかり、私の顔は引き上げられた。

「あつ……………」

どちらが発したのかもわからない。見つめ合ったのは一瞬のようでもあり、長い間のようにもあつた。

秀でた顔、綺麗に剃り上げられた月代や口辺、何より、包み込むような優しい目があつた。嗅いだことのないいい匂い。私の体のどこかが疼いた。

触れられた顎の先から顔全体に火が走った。たまらず顔を伏せた。

「こ、これはまた……、ほんの童かと思ひ、失礼をいたしました。年頃のこんな……」

無理もない。丈は低く、薄っぺらな体。髪もおさげで、身なりと言えば寸足らずの単衣をしごきで結んだ前掛け姿。

「拙者、鯖江藩小納戸、広部一之進。見回りの途中です」

「広部様、さ、そろそろ戻りましょう」

お付きのお侍にそう言われると、一之進と名乗ったお侍は立ち上がった。

「おい、なみ……」

お父が呼んだようだがそれつきりだった。「あ、あの、石田村の百姓甚三の娘、なみでございませぬ。お声を掛けていただきありがとうございますとございました、……」

これだけ言ったらまた顔が熱くなった。

「この辺りは広々として実に気持ちの良いところですね。近々京へ上りますので、すぐとはいきませぬが必ずまた来ます」

一之進様は私の目を見てそう言うのと、お付きのお侍と共に道を引き返した。

立ち上がりその背中を見送っていた私。バシヤツ、突然横手から水を浴びせられた。

昇ちゃんだ。昇太というが、皆そう呼んでいる。私より二つ上で十八になるのに悪さばかりしている。髪もザンバラでお構いなく、よれよれの単衣を尻端折りして禪がいつも見えてい

る。

「もおっ！」

足元にあった鍋磨きの藁束を投げつけた。昇ちゃんはそれを手で受けると、投げ返してきた。藁束は私の頭にあたり、びっくりしてしやがみ込んだ。

「あつ、大丈夫か」

昇ちゃんは声を上げ一瞬固まったが、私が立ち上がって睨みつけると、

「お侍の前ではもつと顔を磨いておけよっ」

そう言つて走り去つた。

夕餉の際にお父が一之進様のことを聞いてきた。見ていたようだ。私はありのままを話した。

「やはりそうか、領地替えの下見分だな。あの石田をみりや藩領にはせんだろうて」

ここら一带は幕府直轄地だった。本保陣屋の管轄で、その上は飛騨の郡代が統括していた。

時折隣の鯖江藩との間で領地替えが行われた。郡代は遠くにいて目が行き届かぬのであるうか、対して鯖江藩は年貢率も、取り立ても厳しいと藩領に入るのを嫌つた。

あの優しそうな一之進様と厳しい取り立てとは結びつかかなかつた。

「おいしいっ」

珍しい鮎の塩焼きを食べて思わず言った。「昇太じゃ。日野川で築をこきえて獲つたらしい」

「ふーん」

その夜から心は浮き立った。夕餉が終わるとすすんで機を織った。地機である。それを見てお父は事情も判らず褒めた。

藍に染めた糸を二種並べて単純な棒縞を織る。今の私にはそれしか織れなかった。

縦糸を箱に巻き綜統に通し、箴に通した。糸の端を布巻に結びつけると布巻についている腰当をしつかりあてた。腰を引いて縦糸をりと張り、足に掛けた引き綱を引いて下糸を持ち上げると杼を通し横糸を張る。糸切れのないことを確認して箴をタンタンと打ち込んだ。

お父には、月末までに二反織るように言われていた。

・二反織りやよいのに三反織ってあとの一反は殿ごへ進上・

しらずしらずに節までつけて口遊んでいた。横糸が通るとききれいな棒縞が浮き上がってくる。棒縞の上に一之進様の顔が浮かんだ。五日で一反織り上げた。いい出来だった。切れも緩みも全くなかった。

仕立にかかると、事情を悟ったお父にひどく叱られたが初めてのわがままを通した。子供のざれごとと高をくくったのだろう、お父は最後に「勝手にしろ！」と言った。

一之進様の身の丈は昇ちゃんと同じくらいだろうか。昇ちゃんの顔を一之進様に置き換えて一心に縫った。いつ来られるのだろう、いつでもいい、半年でも一年でも、そのときお渡しし

よう。袖を通してくださるかなあ。また顎のあたりが火照った。

夏は漸く逝ったようだ。風に冷気が交るようになった。九月、村の百姓家にも世間の噂の一端が入ってくる。

『鯖江藩の今度の領地替えは不調に終わったそうだ。それより間部の殿様が京都で大捕り物をやったらしい。攘夷派を次々と……』

月の終わりころ、裏の畑で土を起こしていると、お母が呼びに来た。

「なみやあ、藩のお役人様がなみにご用があんなさるそうだ。いったいなんだろうね」

ああ、ついに…… 上気する私。どうにか心を鎮めて、少しお待ちいただくようにお母に頼んだ。あわてて家に入り、少しでも顔をつくろい、着物の裾を整えた。頭の手拭いを取ると納戸の棚の風呂敷包みをそつと撫でて、両手でいただいた。

「お待たせしました。なみでございます」

始めて見る顔だった。私は思わず風呂敷包みを後ろに隠した。

鯖江藩物頭中村真吾と名乗った。

「友人の広部一之進は過日京で落命しました。その一之進から伝言を預かって参った」

「えっ……ラクメイ？」

「その日一之進は殿に随行して京の町を廻り、いったん宿舎に入った後、暮六ツの頃に一人で町に出て襲われた。町人に連れられてきたときは息があつたが翌日こと切れた。賊は攘夷派ともうわざされるが定かではない」

「……ら、落命……」

「本陣屋内、石田村のおなみさんにこれを渡してほしいと。控えめで肌の白い可愛い人だったとも。日中、目をつけておいたこれを買ひに出たようです」

中村様は、懐から出した手巾を開き、紅い玉簪を見せると私の前に差し出した。

「……………」

不思議と涙は出なかつたが、顔は強張り、声にならなかつた。中村様は「残念です、いい男でした」と言い残して帰って行つた。

食も進まず、ただ茫然としていた私に父母は深入りしてこなかつた。事実を伝えるとそれきりだった。村の友達には知らない話で、心の内を伝えようもなかつた

数日が過ぎた。今日も裏の川べりで簪を手に川面を眺めていた。

「お親父さんから聞いたよ」

昇ちゃんも川を跨ぎ私のそばに来て言った。「泣いちまえよ。辛いことは涙と一緒に川に流すのが一番いいぜ」

「昇ちゃん……」

しがみついた。泣いた、声を出して泣いた。

「昇ちゃん……、鮎、おいしかった」

「何の話だい」

「昇ちゃん、これ、かんざし……」

「貫ったんだろ。綺麗だなあ、大事にしろよ」
髪に挿してくれた。

「棒縞、上手に織れたのよ」

「そうか、そうか、うまく織れたか」

「うん……」

昇ちゃんの胸は日向の匂いがした。

彼と彼女は同じ町で生まれ、同じ小学校に通い、同じ中学校に通い、同じ高校へと通った。やがて彼と彼女は、二人だけで何の気兼ねもなく過ごせるような、仲のいい間柄となった。二人の間にはいつも心地よい友情があった。しかし二人の間で恋や愛が語られることはなかった。彼が遠く県外の都会へ転勤となって二年が過ぎた。その二年の間、二人が顔を合わせることにはなかった。いま二人は二十五歳になっていた。ある暖かい五月の午後、彼は休暇をもらい二年ぶりに故郷へ帰ってきた。水落駅を出ると、ほとんど変わらない鯖江の町があった。「
〇 ではなくわざと福鉄に乗り換えたのは、彼女と待ち合わせていたからだ。しばらくして彼女が出迎えに現れた。二人は照れて笑った。二年ぶりに会った二人は、どこかよそよそしく、変に緊張していた。彼は久しぶりと言った。彼女はお帰りと言った。それだけで会話は途切れてしまった。けれど二人は何となくはにかんだままだった。それから二人は歩き出した。駅前を通りを北に進み、北野という交差点から坂を少し下ったところに彼の家があった。二

人は今その道を歩いてきた。彼は迎えに来てくれたことに礼を言って、それから、いかにも普段通りだと装って言った。

「そうだ、久しぶりに俺の家でも寄つてく？」

彼女は小さく笑つて、こう言った。「いや、今日はやめとくよ。」

見越してはいたが、彼には少し不意だった。「そうか」落胆したことも意外だったことも隠すように、彼はわざとそつけなく返事をした。

「あのね」彼女が言った。

「私、もうすぐ結婚することになったんだ」

「うん、知つてるよ」

「そう」

「おめでどう」

「ありがとう」

「だから会いに来たんだ」

「お祝いをしてくれるの？」

「もちろん、祝福はするよ——でもその前にどうしても二人で過ごしたかったんだ」

「それは構わないと思うけど・・・」

「ねえ、少し歩かない？」

ちよつとだけ間を置いて、彼女は言った。

「うん、いいよ」

二人は坂を下つて大通りを北へと歩いた。行く当てなんて全くなかつた。途中コンビニで飲み物を買つた。歩きながら二人は、二年の間に起きたことをお互いに話し合つた。話しているうちに、二人の緊張はだんだんと和らいでいつた。ときおり彼女は楽しそうに笑つた。それを見て彼も自然と笑つた。彼は帰省の荷物を抱えたままだつた。それが重く感じてくると、彼はふざけるように彼女にそれを渡した。彼女も嫌がることはなく、二人は交代で荷物を持つた。まるで数年前の二人に戻つたようだつた。

糺町まで来ると、もう一度坂を上つた。二人は少し疲れ、木陰になっている停留所のベンチに腰かけて休んだ。

「ねえ」彼が言つた。

「なに？」

振り向いた彼女を、彼はじつと見つめた。しばらく見入つたままだつた。それから何か言ひかけてやめた。「いいや。何でもない」「ふーん、それより、ぐるつとまわてきちゃったね」彼女は嬉しそうにはしゃいで言つた。後ろで髪を束ねた彼女の横顔を見ると、彼の気持ちは微かに昇つた。彼女をきれいだと感じた。

「このまま日野川くらいまで歩いて行つちやう？」彼女は笑顔だった。彼は、ようやく、何かを話そうとした。「ねえ……」しかし、言葉は彼女に遮られた。「今日は、日焼けしちやうかもねー」

「ねえ！」少し声高になつて彼は言った。

「どうしたの？」

「ちよつと落ち着いて聞いて」

「え？」

「俺、今日、君に会うために帰つてきたんだ。大事なことだと思つて」

「……私が結婚するから、お祝いに、でしょ？」

「いや、あのね——今思つたわけじゃないけどさ、やつぱり、俺、君のことが好きなんだ」

「どうして？」彼女はあまり驚かない様子だった。

「どうしてって言われたつて、君を愛しているんだよ。だから——」

「それは、だめだよ」ためらいがちだったが、彼女はそう言いのけた。

「うん、分かつてはいるよ、分かつてはいるけど……」彼は言葉を続けられなかった。

途切れた会話をどうすることもなく、二人はまた歩いた。晴れた五月の平和な平日の午後がゆつくり過ぎていった。無言で歩くことが、彼には不思議と心地よかつた。しばらくして、口

を開いたのは彼女だった。「さっき言ったことは本当？本気で言ったの？」

「本当だよ、愛しているよ」

「それは嬉しい。ありがとう——でも、本当は何かを期待したの？」

「いや、どうなるかは、俺にだってわからなかった。だって、こんなことは初めてだったから。その、今までで生きてきて初めてだったから」

「そう・・・私も、あなたのことは好きよ、友達として、大好きなんだけど・・・けど、もう色々と遅すぎるの」

「そっか」

「残念だけど、そういうことなの」

「うん」

「がっかりさせたら、ごめんね」

「ううん。そこまで大した期待はしてなかったよ。ただ、今日、一緒にいれただけで十分だよ。」

彼には彼女が涙をこらえているように見えた。瞳が少し潤んでいたからだった。彼は見かねて、彼女の手を握った。しばらく重ねた手はそのままだった。二人は立ち止った。そして無言だった。しかし彼女は、決意したように彼の手を振りほどき言った。「やっぱりだめよ！」

彼はうなずいた。「わかった」それから彼女から顔をそらし言った。「もう帰ろうか」「その

ほうがいい」

「そうだね、ただ、ときどきは思い出してよ。俺が君のことを本当に愛していたってことを」
こらえられず彼女は泣き出した。

市役所の近く、二人の母校が見える丘の近くまで来たころ、辺りは夕方だった。彼女はもう非常に戻っていた。

「じゃあ、ここで別れようか」彼は言った。彼女はうなずいた。

「良い一日だった」

「私も」

「愛してるよ」

「わかってる」

「遅かった？」

「遅すぎた」

「二人ならうまくやっついていけると思ったんだ」

「私もそう思ってたよ」

「きれいになったよ」

「ありがとう」

彼は彼女の手を握った。

「結婚してくれないか？」

「本当に馬鹿ね」

「だめかな」

「もう少し早かったら、よかったのに・・・」

二人は短くキスをした。

「これで最後よ」

「わかったよ」彼はまたそっけなく返事をした。続けて彼は言った。「じゃあ、今日はありがとう。気をつけてね」

彼は背を向けて、来た道を行って行った。それを眺めながら彼女は思った——これで良かったのだ。いつかは今日のような日が訪れるかもしれないと思っていた。いずれ彼とは結ばれるのではないかと、そんな気がしていた。ただ、遅かったのだ。彼女は素敵な婚約者と出会った。それで彼を拒んだ。これで良かったのだ。それなのに彼女の気持ちはひどく揺らいでいた。

彼女は立ち尽くし、去っていく彼の背中を見つめていた。二年の間、何度も彼を思い出し、会える日を心待ちにしていたのに、彼の愛を拒み、これで良かったと思っている自分が、何故かとても惨めに思えた。

急な心境の変化が彼女を戸惑わせた。だが、彼女は自分の気持がさっぱりとわかつた氣になつていた。彼女は自分で自分がおかしかつた。歩いていく彼を眺めながら思つた。遅かつたのは自分のほうだつたかもしれない。もしも、彼を呼びとめ、抱きしめ、自分も愛していると告げたなら……しかし彼女は立ち尽くしたままだつた。やはり、婚約者のことを考えるのだつた。ただただ、氣持ちだけが急いた。

彼女は偶然を待つことにした。もし彼が振り向き、私を呼びとめたら、そのときは彼を選ぼう。もし彼がもう一度こつちを振り向いてくれたなら、彼女の名前を呼んでくれたなら、すぐにも駆け寄ろう。

偶然、彼は思い出した。荷物の中に彼女へのお土産が入つていた。それを渡し忘れていた。彼は振り向き、それから彼女の名を呼んだ。

「そういえば、躑躅には毒があるそうですよ。中毒になると昏睡したりするそうです」

「へえ、そうなんですか。怖いですね」

五月のある日、僕は古びた眼鏡屋の主人と取り留めのない話をしていて、そして思い出したように彼は言う。

「そうそう、その眼鏡をかけると、もしかしたら『人ではない何か』が見えるようになるかもしれないですね」

「へ？」

理解の範疇を超えることをさらりと言われ、思わず新しい眼鏡から主人に目を移す。

「あの、今までにもこの眼鏡をかけて、その……『何か』が見えた人がいるんですか？」

その当然ともいえる問いに、ぼやけた視界の中の彼は少し考えてから答えた。

「いますよ。五、六人くらいですかねえ」

「……えーと、それは多いんですか、ね」

「私にも解らないんですよ、他でそんな話は聞きませんから。まあ今までの方は二日もすれば普通に生活を送れるようになったそうですから問題ないでしょう。ただ、『何か』と親しくなるのはやめた方がいいでしょうね」

それだけ言うと、主人は「失礼」とかかかってきた電話をとった。

僕はまだこの細縁の眼鏡に少なからず疑いを持っていたが、作り手が大丈夫だと言うならその通りなのだろうと思い、かけてみた。

途端に輪郭を持ちクリアになる世界に満足し、主人の前に代金を置いて、小さな声で「ありがとうございます」
と礼を言う。

彼の軽い会釈を背にして店を出て、暇な時によく行く躑躅の綺麗な公園に向かった。今が見頃の躑躅たちは、その身体をピンクやオレンジに染め上げて誇らしげに咲いている。

その中で僕が一番好きなのは、入り口から少し奥に進んだ所にある蓮華躑躅だった。いつもならオレンジ色の群れの前にあるベンチで本を読むのだが、今日は違った。

小さな木陰の下、明るい茶色——光の当たり方によっては深い橙色に見えるセミロングの髪の女性が座っていたのだ。普段は僕以外の人は滅多にいないのに。

珍しいなと思いつながら、彼女が座る場所の隣——もう僕の指定席のような所だ——に腰かけると、彼女は僕を見、話しかけてきた。

「こんにちは」

「……こ、こんにちは」

澄んだアルトの声と大きな瞳。戸惑う僕に、その人は微笑みながらまた言葉をかける。

「いつもここで本読んでますよね。好きなんですか？」

「ええ、まあ……というかあの、どちら様ですか？ どこかでお話したことありましたっけ？」

「あ、ごめんなさい。自己紹介もせずに話してしまつて」

ふふ、と苦笑を零した彼女は、ベンチの真後ろに植わっている花を指さした。

「私はレン、その蓮華躑躅です。あなたがここで読書しているのを、ずっと見てました」

「……え!?」

——これが僕と彼女との出会いだった。

彼女はその後、自分が公園から出られない事と、多分僕以外の人には姿が見えない事、僕に好意を寄せている事を教えてくれた。

そして僕は、自分でも不思議なくらい簡単に、人でない彼女の存在を受け入れていた。きつと先に「何かが見えるかも」と言われたことで心の準備が出来ていたからだろう。二日すれば見えなくなるとも言われたから、どこかで安心していたのかも知れない。

しかし驚くべきことに、三日後にも二週間後にも、その一か月後にだって僕が目から彼女が

消えることはなく、ふと気づけば出会ってから一年以上経っていたのだ。

自分に好意を持っている人と長く一緒にいれば、その相手と親しくなりたいと感じるのが普通だと思う。けれど「親しくならない方がいい」と言われている以上、彼女が好きだと気づいても、僕は彼女と『恋人のような知り合い』という曖昧な関係が続けるしかなかった。

私が彼、圭介と出会って——正確に言うなら私が人の姿になってから四つの季節を越えた。初めて彼が私の前で本を読んだのは確か三年前。その時からずっと人になりたいと願っていたら、何の偶然か叶ってしまった。

一年間ほとんど毎日接しているなら距離が縮まったっていいはずなのに、時が経つほど私達はかみ合わない歯車のように軋んでずれていく。きつと私の一方的な想いのせいだ。

嫌な事ばかり考えてしまう私は、遊歩道が夏の光に焼かれているのを眺めていた。

「……こんにちは、暑いね」

耳に心地よい声と落ちた影にハッと顔を上げると、額に汗の粒を浮かべた彼が立っていた。

咄嗟に微笑んで会話を繋いだ。

「本当に。ケイは体調崩してない？」

「大丈夫。レンこそ平気？ 最近あんまり雨降らないけど」

「これくらいなら全然」

答えると、彼は良かったと口を緩めた。レンズ越しの目が何となく熱っぽい。その熱い硝子玉に触れたくて手を伸ばすと彼は一瞬驚き、困ったように笑って身体を引いた。

拒まれた、その事実は刺すような痛みになり、胸に不安を根付かせる。彼はそれに気づいたのか話を逸らすように口を開く。

「……今日は授業があつてさ、これから大学行かなくちゃなんだ、ごめん」

「そうだったの、頑張つてね」

その「ごめん」は何に対する言葉？ そんな事を訊けば、きつと優しすぎる彼は私を傷つけない言葉を選んで、遠回しに『君には応えられない』と距離を広げるのだろう。だから、訊けない。

「レン？ どうした？」

「何でもないの。それより時間は平気？」

「あ、大丈夫じゃないかも、また後で！」

腕時計を見て焦った彼は手を振って駆けて行く。振り返って周りを見ると、遊びに来ている人々が彼に奇異の目を向けていた。

「あの人、誰に手を振っていたのかしら」

その声で自分が彼以外に認識されないことを思い出し、ざわりと心が波立つ。

私が彼の綺麗な目に映っていられるのはいつまで？ ずつともかもしれないし、明日までもし

れない。そんな不確かな存在の私は、彼と連れ添うことなどできないんじゃないか。

さつき感じた不安がじわじわと心を侵しながら焦燥感に変わる。手を握り締めて深呼吸した時、その感情がある一つの答えに私を導いた。

そうだ、彼を私のものに——躑躅の私だからこそできる方法があるじゃない。どうして今まで気づかなかつたんだろう。初めからそうしておけば良かったと思いつつながら、私は無意識に笑みを浮かべていた。

今日のレンはどこかおかしかった。僕はそんな事を思いながら、薄暗くなった空を見て足を速める。多分彼女は、後でという言葉だけを信じていつも通りあのベンチに座っているだろう。無駄に長い時間待たせるなんてことはしたくない。

それにしても、昼間はなぜ突然僕に触れようとしたんだろう。とりあえず本人にそれとなく尋ねてみようと思ふのをやめて、彼女のもとに走る。公園にはほとんど人がいない。

「ごめん、遅くなって」

「ううん、大丈夫」

謝ると、夕闇に輪郭を溶かした彼女は初めて僕に声をかけた時と同じ微笑みを浮かべて立ち上がった。どうしたのと訊く前に身体を強く引き寄せられ、顔が近づく。

(…………え?)

それがキスの距離だと気づいた時にはもう唇が塞がれていた。触れた身体の柔らかさと温かさに心臓が跳ね、体温が上がる。

一度離れて、何か言おうとした口がまた塞がれる。仄かに甘く、深い口づけに頭がくらくらした。

「……………ごめんなさい、ケイ」

長いキスの後、離れた彼女は瞳を伏せ言った。色素の薄い睫に当たった街灯の光が乱反射するのを目を奪われていた僕は、彼女の唇が三日月を描いているのを見落としていた。

「いや、別に……」

言いかけて、身体がぐらりと傾いだ。驚いて体勢を立て直そうとするのに力が入らない。膝をつき彼女にしがみつくのが精一杯の僕は、自分を見下ろす茶色い目を見返した。

「レン、これ、どうということ……っ？」

声を絞り出す度に頭痛と吐き気に襲われる。気を抜いたら今にも倒れこみそうだ。虚ろな微笑みを口元に貼りつけた彼女はしゃがみ、僕の肩を支えて囁いた。

「私からの告白。私のものになって」

どこか恍惚とした響きと一緒に、華奢な指が僕の手に絡められる。それを握り返すこともできなまま崩れそうになる意識を必死で保とうとすると、ある会話がふと脳裏をよぎった。

——躑躅には毒があり、中毒になると昏睡する。

「どうしてこんな大事なことを忘れていたんだろう。思わず笑いたくなるくらい僕は間抜けだ。

「……まさか君にも毒があるなんて思ってたな」

「ごめんなさい、でももうこれしかなかったの」

この後僕はどうなるんだろう。霽がかかった頭で考えてみるけれど、酷い耳鳴りと唾魔に邪魔される。

霞んでいく視界の中僕が最後に見たのは、泣きそうに笑う彼女の綺麗な顔と、「好き」の二文字を紡ぐ唇だった。

「ただいま、お母さん。私もみんなみたいにメールしたいな。」

「真理、そんなにしたいの？」

「みんな学校でもメールの話ばっかで仲間外れにされちゃうからいいでしょ？」

中学生になってからもう半年。私はメールをしていないという理由だけで、周りの子たちの輪に入れてもらえないことがあった。

「じゃあ、今晚お父さんに相談してみるわ。」

次の日の朝、

「真理、お父さんがメールしてもいいって。」

うれしかった。メールの許可が下りたのだった。

私はメールを始めた。咲楽ちゃんが私のケータイに初めて登録された子だった。咲楽ちゃん
は、顔文字も使えない私のメールに付き合ってくれた。

『その顔文字使い方間違ってるよ！！それ投げキスだから、間違っても男子に使っちゃダメだからね(〜)』

こんな風に、いろいろ教えてくれた。

『私、男子とメールしたことないよ(▽|△)』
不安に思った。

『じゃあ、メアド教えてあげる♪これしゅんのメアド。』

△△△△△△△@×××××××

しゅんなら真理でもメールしやすいんじゃない？小学校も一緒だったし。メール送ってみなよ！咲楽が教えてくれたので送ってみました。って言えば大丈夫(〜)』

小泉くん：!!その時、私はケータイの画面に小泉くんのメアドが映し出されていることが信じられなかった。小泉くんとは小学校でクラスが同じだった。優しくて面白くてカッコいい。みんなに人気で先生にも信頼されている。私はそんな小泉くんがたまに見せるお茶目でいたっずらっぽい笑顔が好きだった。こんなに完璧な人でも、そんな表情になることがあるんだなって。だから、小泉くんのことをもつと知りたかった。でも中学校ではクラスも離れてしまい、全然話せていなかった。このメールが小泉くんと私をつないでくれると思った。本文を打っているとき心臓の鼓動が大きく聞こえた。ボタンを押す指が震えた。でも結局、送信できなくて咲楽ちゃんに助けを求めた。

『私なんか送って大丈夫かな？』

すぐに返信がきた。

『大丈夫、勇気出して(＊▽)』

私はなんとか自分に大丈夫と言い聞かせて送信ボタンを押した。

『真理です。いきなりメール送ってごめん(≡)(≡)咲楽ちゃんがメアド教えてくれたから』

その後は、何にも手をつけられなかった。ケータイが鳴らないまま、時間だけが過ぎていった。部屋には時計の秒針が動く音しか聞こえなかった。

♪ピロリロン ピロリロン

その瞬間、私はケータイに飛びついた。すぐにメールを開いた。しかし、届いたメールは私の期待からは外れたものだった。

『言い忘れたけど、しゅんはメールの返信遅いよ。あと、しゅんのメールは短いと思うよ。でも、ちゃんと返信はしてくれるから♪』

期待していたメールではなかったけれど、咲楽ちゃんからの一通のメールが私を安心させた。でも、いきなり小泉くんにメールを送ってしまっただけでどう思われたらどうかという不安は、まだ残っていた。

♪ピロリロン ピロリロン

今度は期待していたメールだった。

『よろしく(ノ)(ノ)』

たった「文字のそつけないメール、それがさらに私を不安にさせた。私とメールするのが嫌なの？そう問いたくなる気持ちを抑え、私は頑張つて明るく返した。

『もうすぐ校外学習だね！楽しみ(キ)(キ)』

頑張つたのに、すごく頑張つたのに、その日これ以上ケータイが鳴ることはなかった。寝る時間になってベッドに入っても、いつもは寝つきがいいのに今日は全く眠れない。自然と頭に小泉くんとメールのやり取りが浮かんできて、さらに眠れなくなる。明日部活から帰った時、きつと返信がきているはず。私はそう信じた。

冬休みに入る頃には、私は小泉くんと普通のメールをするようになっていた。私も毎回ドキドキしなくなつた。小泉くんからの返信は短くてゆっくりだけれど、私がどんなにネガティブ発言をしても励ましてくれた。そんな風に私に優しく接してくれる男子は小泉くんしかいない。そんなある日、遅くても次の日には小泉くんからの返信がきているのに、今日は届いていない。久々に不安になつた。どうして？私とメールしたくなつたのかという考えが頭をよぎる。でも、私から送ろうと思つても送る内容が見当たらない。私は何もできないまま、不安な気持ちで一日を終えた。

次の日も、そのまた次の日も返信はこなかった。送るべきか送らざるべきか、私は毎日悩んだ。そして小泉くんから返信がこなくなつてから三日、何もしなかつたら状況は変わらない。

一通だけ送ってみようと決心した。

『もうすぐ冬休みが終わるね。』

小泉くんはどんなにつまらない内容でも必ず返信はくれた。遅くなっても短くなっても……だから、きつと返信をくれるはず。と思ってメールを送信した直後、ケータイが鳴った。小泉くんからかと思ったが、咲楽ちゃんからだった。

『最近しゅんから返信きてる？今、鯖江の親戚の所へ行ってるらしいよ！しゅんのお母さん楽器好きだから、今頃マリリンバの演奏でも聞いているんじゃない？』

そういえば、鯖江はマリリンバが有名だとテレビで見たことがある。また咲楽ちゃんからのメールが私を安心させてくれた。一言くらい私にも言ってくれば良かったのに。なぜ咲楽ちゃんにだけ……

久々の小泉くんからの返信。

『うん。そうだね。』

最近、私は思ってしまう。小泉くとメールすべきじゃなかったのかなって。きつとメールをしていなかった方が幸せだった気がする。返信がこないと心配になるし、きても不安になる。小泉君と咲楽ちゃんがすごく仲がいいことも知ってしまった。小泉くと話せてうれしいはずなのに、そう思えてくる。でも返信はしなくちゃと思う。嫌われたくないから。なんか矛盾してる。

『宿題嫌だね。』

このメール以降、小泉くんからの返信は一切来ない。もうかれこれ一か月はきていない。学校が忙しくて、小泉くんの事を忘れていられたのが救いだつた。

『小泉くん鯖江に引越すらしいよ!』

久々にきたメールは咲楽ちゃんからだつた。えつつ、聞いてない。どうしよう…どうすればいいの？

ずっと迷っていたら小泉くんが出発する日が近づいてきた。結局、私は何もできなかった。もう、終わってしまった事はきつとみんな忘れていくのだろう。明日からみんな普通に生活するんだろうな…そんな時小泉くんからメールがきた。

『明日の部活が終わつた後、校門で待つてる。来てほしい…』

久々の小泉くんからのメール。校門で何があるんだろう。でも、初めて小泉くんから誘われたんだから行かなくちゃ。そう思いながら、ベッドに入った。

次の日、校門に着いたらもうすでに小泉くんがいた。

「ゴメン、しばらくメールしなかつたのは引越すことをオマエに言いたくなかつたからなんだ。オマエと離れることがつらかつたから。黙つててゴメン。今日、心残りが無いようにオレの本当の気持ちをオマエに伝えようと思う。好きです。これからはメールじゃなくて、もつと気持ち伝わる手紙で引越してからでも連絡をとりたい。」

本当？まさか、こんな私が小泉くんに告白されるなんてありえない。信じられない。

「ほ、本当？」

これを言うのが精一杯。

「本当だよ。好きな人にウソなんてつかないよ。」

「本当なら手紙、交換しよ！」

言えた。

「オマエからの手紙を楽しみに頑張るよ。ありがとう、来てくれて。」

「頑張つてね。すぐに手紙送るね。」

私は幸せだ。今までの人生で一番幸せだ。

「うん。じゃあね。」

小泉くんは帰って行った。小泉くんの背中がどんどん小さくなっていく。もうこのままずっと小泉くんに会えない気がする。

『頑張ってる？私も小泉くんと会えなくて寂しい気持ちと毎日格闘中だよ。でもね、あの日、小泉くんがああ言ってくれて嬉しかった。私も小泉くんの事が好きだったから。でもその時はウソみたいで、私みたいな人がなんでつてなっちゃったから……ごめんね。でも私は幸せ者だよ。だって小泉くんとお手紙交換できるんだよ！お手紙楽しみにして、頑張ってるね。』

朝、学校に行く前にポストに出した。どんな手紙が届くか楽しみ。朝からワクワクした気持ち

でいっぱいだ。

三日後、小泉くんから手紙が来た。

彼との距離は広がったけれど、心の距離は縮まった。メールという電子的なツールではなく、手紙という昔ながらのツールで。顔文字では伝わらないことが手書きの文字では伝わる。手書きの文字じゃないと伝わらないこともある。それを彼は教えてくれた。

近松の里たちまち

近松の里 たちまち スタンプラリー
パワースポット + KOIBANAめぐり

※近松の里づくり事業推進会議で作成した冊子を掲載しています。

2013年 近松の恋物語が360年の時を経て現代によみがえる…



近松の里 たちまち スタンプラリー

パワースポット+
めぐり



近松の里
たちまち
スタンプ
ラリー



こちろもアキパワー情報

「春を抜き、春を与える」名号岩

●名号岩 (みょうごういわ)

天神山麓の大岩石には、天保13年(1842)に刻まれた「雨無阿弥陀仏」の名号が深く刻まれています。名号には救苦と美の働きがあるとされ、通行する人々に唱えさせるものだと言われています。



伊野姫パワーで待ち人来る

●越智神社 (おちじんじや)

泰澄大師のその母「伊野姫」が祭神と伝えられている立待小学校の前の小さな社。古く泰澄大師が子供の頃に母親が降り立って待っていたという伝説から「立待」の名称が生まれたとされています。



近松門左衛門が幼少期を過ごした、「近松の里 たちまち」、古い面影を残す城下町には、かつて栄えた活気ある土地の記憶があります。由緒ある神社には、日々の喧騒を忘れさせる神聖な空気が流れています。豊かな自然や草花には、心身をやさしく癒してくれる力があります。そんな「近松の里 たちまち」は、2013年に近松門左衛門生誕360年を迎え、それにあわせて「さばえ近松文学賞 恋話(KOIBANA)」の募集を始めます。この冊子では、近松ゆかりの歴史と自然があふれる場所と、そこに咲く花に込められた恋話＝恋花メッセージをご紹介します。すべての場所を巡って、時を越えて人を元気にする近松のパワーに触れてください。

【この本の使い方】

近松にゆかりのある
パワースポットを、写
真と文章で紹介

訪れた記念に、
ちかもんくんスタンプ
を、押しましょう!

それぞれの場所に設置され
た「近松の里めぐり物語
BOX」「近松の里めぐりBOX」
の中に、スタンプや情報誌
が入っています。



「見どころ」「なんだろう」
「ひとやすみ」の3つに分
け、その場所ならではの
ポイントを紹介

「近松との縁」では、近松
門左衛門の幼少時代を振
り返ります

さらに!応募してゲットしよう!

12
ポイント
ぐるっと
まわって
12
ポイント
ももらおう!

別紙の応募ハガキに12カ所のスタンプを全部兼ね、必要事項をご記入の上50円切手を貼り郵送してください。後日「近松の里 たちまち パワースポット+恋話めぐり」証明書とちかもんくんグッズを郵送いたします。開題日には、立待公民館・まなべの館でも受け取ることができます。また、Wチャンスとして毎年10月に開催される「たちまち 近松まつり」で抽選会を行い、抽選で「越前漆器特製ご利益開運絵馬」をプレゼントいたします。

※詳しくは応募用紙をご覧ください。



恋話＝恋花(KOIBANA)

恋話を題材とした作品が多い近松門左衛門。「近松の里 たちまち」めぐり、各所で見かけた花々にも、昔から伝わる「恋話」や花の名を録んだ「恋歌」が存在します。花言葉と恋話&恋歌を紹介しながら、プチメッセージを届けます。

2013年、近松門左衛門生誕360年『曾根崎心中』初上演310年を記念して

さばえ近松文学賞
恋話を募集します。

【テーマ】

近松の恋愛が時を越えて
現代によみがえる

(400字詰め原稿用紙5枚程度)

map ナンバー

1

近松門左衛門記念碑庭園

(近松の里めぐり情報館)

ちかまつもんだえもんきねんていえん



東洋のシェイクスピアと称される近松門左衛門は、鯖江市が誇る劇作家。近松が幼少期を過ごした「立待」をめぐる旅は、ここ杉本町の立待公民館敷地内にある近松門左衛門記念碑庭園から始まります。庭園は、浄瑠璃に欠くことのできない三味線の形をし、初夏になるとサツキの花で彩られます。正面奥に近松の辞世文を記した碑があり、父の吉江藩士・杉森信義と近松が越前を離れるまでの解説が記されています。庭園手前には、福井県出身の作家・水上勉氏揮毫による「近松門左衛門先生由縁之地」と記された石碑も建てられています。



見どころ



近松の里めぐり情報館

立待公民館内にある「近松の里めぐり情報館」では、ただ一人の吉江藩主「松平昌親公」や、元禄三大文豪のひとつ「近松門左衛門」と鯖江との関わりについて紹介しています。文庫の人形や衣装等の展示をはじめ、鯖江市在住の創作粘土人形作家かとうかずお氏による近松と鯖江に関するジオラマ風人形や、映像、展示等があり、子どもから大人まで楽しみながら、近松の幼少時代を振り返ることが出来ます。



七歳で最期の足跡の人形



ここにスタンプをおしてね！
+この世初の聖地で！
物語BOXにスタンプが入っています。



サツキは「マツジヨ」里が小さくて盛りだくさん。



サツキ(杜鵑花) 花言葉: 協力を得られる、節約、野制

恋話
KOH BANA

中国の伝説、蜀の地に天から下った「望帝」という王がいました。その地へ治水に詳しい「べつぎ」がやって来ます。べつぎの留守中、その妻と通じてしまった望帝は自分を恥じ山の中に隠れ、苦悩の糸、死んで杜鵑(ホトトギス)に生まれ変わります。最も優しくも激しく情を燃やした血が地上に落ち、そこから美しい花が咲き、杜鵑花と呼ばれることとされています。

春メッセージ「何事も度を過ぎないよう、控えめに」



水の神(龍)と、生命の再生(蛇)のお話が伝わる

map ナンバー

2

西光寺表門

さいこうじおもてもん



全国でも珍しく殿号と呼ばれる寺院「石田殿西光寺」は、本願寺7世・存如が旧石田村に開いた道場を起源とし文禄4年(1595)、現在地に再建されました。表門は、吉江藩主だった松平昌親公が福井藩主を継ぐこととなり、廃藩となった吉江藩邸(館)の門が西光寺に移築されたと伝えられています。薬門形式の門は寺院としては特異であり、建築様式でも江戸時代中期の特長が認められることなど、当時の面影を残す希少なものと云えるでしょう。国の有形登録文化財に指定されています。



ここに
スタンプを
おしてね!
そこの世社の壁のてり
物館80Xに
スタンプが
入っています。



? なんだらう

「じゃぼんこう」の由来

江戸時代、西光寺に迎えられた第10世・寂周は、生来病弱だったため、乳母「お通」が同行、献身的に世話をします。やがて、病癒の再来とされるほど人々の崇敬を集めた寂周でしたが、徳望が高まるほど健康が気がかりなお通。ついには自分の命を寂周に捧げて欲しいと池に身を沈めます。その年の報恩講は雷雨となり、池から龍(蛇)となったお通が舞い上がったという伝説から「報恩講」が「蛇恩講」、「じゃぼんこう」と言われるようになりました。



近松との縁



大イチョウ

西光寺の境内にある推定樹齢400年の大イチョウは、立役の歴史を見守ってきました。秋になると黄金色に輝く木を見上げ、銀杏拾いを楽しんだ幼い近松が思い浮かびます。



ケイトウ「繡縷」(からあい) 花言葉: 色あせぬ恋、情愛、おしゃべり

恋話

KOI BANA

「秋さらば 写もせむとわが蒔きし 繡縷の花を 誰か採みけむ」(与謝蕪村)
秋に染めようと思って蒔いた繡縷の花が、誰かに摘まれてしまった。繡縷の花は「思い人」を意味しています。

✿メッセージ「時機を見極め、後悔するまえに告白を」



不動明王に見守られて力が湧いてくる

map ナンバー

3

糺野お清水

ただずのおしょうず



老杉が生い茂り、清水の湧き出る様子が京都の糺野に似ていることからこの地を「糺」と呼ぶようになりました。糺は鯖江台地の北西に位置し、大地と平地の間から湧くお清水は、神事に使われる名水として古来より大切に扱われてきました。また、野菜や農機具を洗う場所が区別され村人の生活にも欠かせない水でもありました。かつて数カ所あったお清水も、こちらを残すだけとなり年々その水量も減りつつあります。いつの日か、こんこんと湧くお清水に戻したいものです。立待村志には、糺に「糺清水」があったことが記されています。



? なんだろう



お清水を守る白不動明王
糺野お清水に祀られているのは、右手に剣を持ち、左手に鏡を持つ白不動明王。あらゆる「魔」を滅ぼし、幸福を与えらるる仏様は、昔も今も糺野お清水の水源を静かに見守り続けます。



近松どの縁



水路脇に隠れるように存在する糺野お清水

清水川から西光寺前を流れる水路脇に、今は一つになってしまった糺野お清水があります。近松の頃は、数カ所のお清水が水量も豊かにこんこんと湧き出ていたそうです。



ここに
スタンプを
おしめてね!
その
近松の里のBBOXに
スタンプが
入っています。



水際に咲く
かわいい花。



パンジー(すみれ) 花言葉:物思い、私を思ってください、私はあなたを思う、純愛

恋話
KOH BANA

ヨーロッパでは古くから、愛する人に「天使に愛された花」のいい伝えをもつパンジーの花を贈ります。天使に愛された花が奇縁を起こしてくれそうです。

※メッセージ「素直な気持ちも、花に託してみても」



人と人を繋ぎ、物事をスムーズに運ぶ

map ナンバー

4

石田の渡し場跡

いしだのわたしばあと



江戸時代から明治頃まで、水量が豊富な日野川では船を利用して「河川交通」が盛んでした。米やさまざまな物産が船積みされ三回湊まで運ばれました。古い文献によると、この石田にも舟渡し場があったとされ、日野川に交差する「浜街道（越前海岸から吉川に至る街道）」の渡し場として利用されたことが記されています。長さ18m・幅2mほどの渡し舟が一艘あり、石田橋50m下流の大きな柳が船着き場になっていたようです。明治40年代、道路が整備され木製の橋が架かると石田の渡し場も廃止されました。



ひとやすみ



渡し場跡で往時を偲ぶ
現在、石田の渡し場跡がある日野川の河川敷には、青い芝生が植えられ整備が進んでいます。渡し舟が行き来し、旅人の足となっていた見晴らしのいい渡し場跡を眺め、往時を偲びましょう。



近松との縁



近松と幸若舞を繋いだ石田の渡し

近松作品に大きな影響を与えたとされている「幸若舞」は、越前朝日町を発祥の地とし、能や歌舞伎の原型と言われています。近松は、この「幸若舞」を見るため石田の渡しを利用したのでしょうか。現在の石田橋の欄干は、当時をイメージした渡し舟がモチーフになっています。



ここに
スタンプを
おしてね！

石田町
近松の足跡で「BOX」に
スタンプが
入っています。



子どもの頃を思い出す
クローバーの花言葉。



クローバー（シロツメクサ）

花言葉「約束、恥を思い出して下さい」

恋話

KOI BANA

アイヌの青年が恋人に逢いにくためにのった舟が沈みました。恋人は彼の亡骸を体に結び、沼に身を投げました。翌朝、その周りにはクローバーが咲き乱れたそうです。

※メッセージ「約束をおろそかにすると、気持ちはずれ違います」



難関突破! 遠回りしてこそ得られるものがあるはず

map ナンバー

5

吉江七曲り通り

よしえななまがりどおり



正保2年(1645年)から29年間、松平昌親公を藩主とする吉江藩がありました。七曲りは吉江藩の城下町の名残りで、町人町の一つ新町から藩主の住む陣屋までの道のりを、七曲りの名の通り何度も屈曲させ大回りさせるといふ城下町特有の道路構造をしています。当時は、入口には木戸、境に高札場があったと言われています。現在は当時の佇まいを見る事は出来ませんが、変わらない地割りや道路から吉江藩当時の様子を伺い知ることが出来ます。



ひとやすみ



古い町並みと桜の木

吉江藩2万5千石の城下町の面影が残る、七曲り通り。一年を通して賑わっていますが、春には桜の花で彩られ、美しい風情を醸します。



近松との縁



近松が暮らした城下町

10年余りをこの城下町で暮らした近松。この界隈に足を踏み入れると、幻想的な雰囲気、文化的景観と古民家のすばらしさを堪能できます。当時の力平型の通りが現存し、町屋、商家などが住師を思い起こさせてくれます。




ここに
スタンプを
おしめてね!

この
伝統的景観の中心部に
スタンプが
入っています。



19年09月14日の足音を聴く
通関の物語。


サクラ 花言葉: 純潔、優れた美人
恋話 「あしひきの 山桜花 一目だに 君と見れば 我れ恋ひめやも//大伴家持
 山に咲く桜の花をあなたと一緒に眺められたなら、こんな風に花が恋しいと
 は思わないでしょう...病の床から恋人を思い詠んだ歌です。
 ♪メッセージ「心が通じていても、言葉で伝えることも大事です」



悪夢を良い夢に替えてくれるという歴史ある古いお寺

map ナンバー

6 福正寺 ふくしょうじ



吉江藩関係の史跡が数多く残される吉江町周辺。こちらの福正寺もそのひとつで、創建は文治2年(1186)。元は天台宗の寺院でしたが長享2年(1488)に浄土真宗に改宗。戦国時代の戦火を被りながらも寺坊が守られ、松平昌親公が吉江藩邸を建築する際、土地を交換し現在地に寺域を定められました。この時、松平昌親公より多くの材木を寄進されています。長い歴史と人々の祈りに培われた不思議な力が感じられます。



ここに
スタンプを
おしてね!

そこの
番札の裏側く/BOXに
スタンプが
入っています。



ピンクと白の千日紅
まよい花がゆらゆら。



見どころ



本堂正面軒下に 不思議な雲獣

こちらの木鼻に彫刻されているのは「雲獣」。雲獣は、悪夢を食べてくれたり、悪夢を良い夢に替えてくれたりするそうです。



近松との縁



近松が遊んだ 歴史ある古いお寺

近松が、吉江藩士となった父と一緒に移り住んだのは福松君(松平昌親公の幼名)が元服した明暦元年。このとき近松は2歳。このお寺の境内で遊ぶ近松を思い浮かべることができます。



スズラン

恋話 KOI BANA

花言葉「幸福、純和」。幸福が戻ってくる、純潔

春の女神オスタラが、この花の守護神。パリの風習では5月1日にこの花を贈ると幸福が訪れるという、恋人に捧げる花です。

※メッセージ「終わることは、はじまること。一步踏み出しましょう」



「学問の神様」菅原道真と乙千代丸を祀る親子愛パワー

map ナンバー

7

西番天満神社

にしばんてんまんじんじや



ご祭神は、「学問の神様」として知られる菅原道真公。公の第3子である乙千代丸がこの地に住み、公の像を彫ったとされています。その後、落雷により御神像は焼失し、作り直されました。菅原道真公を祭神とする西番天満神社は、近松の父が仕えた吉江藩主・松平昌親公の祈願所でした。立待の里の総鎮守の社でもあり、村人の信仰を集めてきました。後年60歳を越えた近松は、菅原道真の大宰府への配流を題材にした「天神記」という傑作浄瑠璃を書き上げます。



見どころ



乙千代丸神社

乙千代丸は、菅原道真公の第3子。父菅原道真が大宰府へ配流になったとき、京都を逃われ、家臣とともに立待地区の杉本の地に辿り着きました。乙千代丸は、神像を削り、父の道真として朝夕拝しました。その像を収めた天宮笠の横に寄り添うように、乙千代丸を祀る神社が建てられています。



近松との縁



国性爺合戦の絵馬

近松の代表作のひとつ「国性爺合戦」は時代物の中でもっとも有名な作品。その絵馬が奉納されています。このあたりで一冊大きな絵馬として知られています。



ここにスタンプを寄せてね！
そのお世評の書場で、物語BOXにスタンプが入っています。



目撃の通り...
美味しい味が楽しめます。



ウメ 恋話

KOI BANNA

花言葉：高潔な心、潔白、愛んだ心、幸福

「春なればうべも咲きたる梅の花君を思ふと夜寐(よい)も寝なくも」/曾根守飯氏安麻呂 梅は「恋」のこと。恋する人を思うと夜も寝られない...寝れない夜の恋心を詠んでいます。

※メッセージ「強がらずに、会いたい気持ちを素直に表現してみてください」



リーダーシップを発揮した松平昌親公を学び能力アップ

map ナンバー

8

吉江藩館跡

よしえはんやかたあと



吉江藩が成立した正保2年(1645)、吉江藩主・松平昌親公は陣屋や町並みを整備。従来の町に新しく整備した町をあわせて「十一口」、これを縦に並べて「吉江」とされ、立待郷吉江町が生まれました。昌親は、この頃から政治家としての手腕をふるい、土地を開墾し新しい農地を開拓したり、鍛冶屋や木綿の織物職人の育成など、商工業に力を注ぎます。結果、吉江は丹生郡の政治経済の中心として隆盛を極め、「小江戸」と呼ばれるほどでした。延宝2年、兄の福井藩主・光通が死去し昌親が福井藩主となるまで、わずか30年足らずでした。



? なんだろう



松平昌親公 瑞雲寺蔵

正保2年(1645)、結城秀康の子で第3代福井藩主・松平忠昌が死去。その後を子の松平光通が継ぐ。その時、松平光通は、弟の松平昌親公に2万5千石を分与するが、越前国内各所に分散していたため、まず本拠地の兼堂を行ねねばならなかった。慶安1年(1648)、松平昌親公は母所を吉江に設置することを許可され、吉江藩が成立しました。



近松との縁

近松の父が仕えた吉江藩

立待郷吉江の町が生まれた正保2年、昌親公はまだ6歳でした。その時、養育係となった付き人の中に近松の父である杉森信義の名があります。昌親公が元服したときに、杉森信義も2歳の近松とともに吉江に入ります。



ここに
スタンプを
おしえてね!

※この近松の書簡で1
冊1冊BOXに
スタンプが
入っています。



石積の傍らに、
ナadeshikoの花をみつけました。



ナadeshiko

花言葉:純愛、恋慕

恋話
KOI BANA

恋話

KOI BANA

「ひさかたの雨は降りしくなでしこが いや初花に 恋しき我が背! 大伴家持
雨が降り続いても、咲きたてのなでしこのように恋しく思われるあなた…慕
る恋心を隠んでいます。

※メッセージ「毎日が楽しくなるような、何かに恋してませんか」

「東洋のシェイクスピア」と称される近松を学んで諸芸上達祈願

map ナンバー

9

近松門左衛門坐像

ちかもんくんざいもんざそう

(近松情報案内所)



鯖江市には、歴史・伝統・文化を感じるすばらしい地域の宝があります。その中でも全国に誇れるブランド力の高い宝として、江戸時代の文豪(浄瑠璃・歌舞伎作者)近松門左衛門の存在があります。2歳から10年あまりの多感な少年時代を吉江で過ごした近松。その土壌は、越前鯖江の豊かな自然と人情、風情に育まれたと言えるでしょう。浅水川沿いの通りに面した見晴らしのよい場所に、作品を執筆しているかの如く筆を走らせる近松の坐像がどっしりと鎮座しています。

近松門左衛門の坐像が、ここに設置されています。

ここに
スタンプを
おしてね!



うつくしき和紙な香雪の花が
ついに咲いていました。



ひとやすみ



近松情報案内所

近松関連の情報や案内チラシがたっぷり。「近松の里 たちまちめぐり」の情報拠点となる案内所です。無料レンタサイクルも完備しています。

ちかもんくん号に乗って
散策しよう!



無料レンタサイクル

「近松の里」を散策するのに、無料レンタサイクルをご利用ください。

連絡先: 現地にてご確認ください



ユリ 恋話

KOI BANANA

花言葉: 純潔、誠実、無垢

「さ百合花 ゆりも逢はむと 下庭(は)ふる 心しなくは 今日も経てもよ/大伴家持 百合は「あとで」と重なる言葉、後で逢えると思わないと、今を過ごせない気持ちを表します。

※メッセージ「深呼吸、どちらも大事なら自分のペースを大切に」



信じる人に幸運を招く「三度栗」の不思議な話

map ナンバー

10

大谷公園

おおたにこうえん

(実のなる公園)



大谷公園には、親鸞上人の「三度栗縁起」という伝説に由来する3本の栗の木があります。越後に向かう親鸞が、民家で説法をしました。しかし、誰も話を信じなかったため、焼き栗を庭に植え「この実が年に3度実を結んだならば、私の説法に嘘はない」と言い立ち去ります。後に、栗は1年に3度実を成し、「三度栗」と呼ばれました。3本の栗の木は、その子木を移植したもので、「実がなる」が「実る」となり、心願成就のご利益があるとされています。



ここに
スタンプを
おしてね!

この
近松の聖徳寺IBOXに
スタンプが
入っています。



今が掛けがらう懸へと...
お理想的な写真に出会えます。



ひとやすみ



実のなる公園

グミ、栗、柿、イチジク等、実のなる樹木を植樹して、四季を通し「育て、収穫し、食する」といった体験学習型公園を目指しています。起伏に富む地形を活かした楽しい空間で、子供たちも自由に遊べます。



近松との縁



近松が愛した 立待の風景を眺める

左右の竹林を仰ぎ見ながら石段を登りつめると、見晴らしの良いのどかな立待の町の景色が広がります。うぐいすを始め、いるいな野鳥の声を楽しみながら、近松が愛した城下町に思いを馳せましょう。



リンドウ

恋話

KOI BANANA

花言葉：正義、恋している時のあなたが好き、さびしい愛情

平安時代、おしゃれな花とされ、女御たちの衣裳の模様になつて使われました。リンドウが1本で咲く姿から「恋しているあなたを愛する」というやさしい花言葉ができました。

※メッセージ「落ち込んだときは、ひとりの時間が必要です」



まっすぐ伸びる大杉にあやかって成長を祈願

map ナンバー

11

春慶寺

しゅんけいじ



寺伝によると、春慶寺の前身は泰澄大師が白山修行に立つ際、立待にあった草庵に名づけた「心敬寺」にあるとされます。戦国時代には、心敬寺を中心に一千坊がひしめいていましたが、織田信長の越前侵攻の焼き討ちに遭い現在の寺院だけが残りました。正保2年(1645)吉江藩成立後、藩主・松平昌親公の篤い信仰のもと、寺号を天台宗「春日山 春慶寺」へと改め、同藩の祈願所に定められました。泰澄大師伝記には、大師が三十八社より越知山へ通う途中、一草庵であった当寺において香や菓を供えて選擇したとあります。寺の西側には、徳川家家紋の原型になった「二葉葵」が植えられています。



ここに
スタンプを
おしてね！
その
お礼の景観で「おX」に
スタンプが
入っています。



大きな梅の実は、毎年見事な花を咲かせます。



見どころ



本堂脇に鯖江市指定文化財 推定樹齢400余年の御神木(大杉)の、まっすぐ伸びたその姿に「子どもがすくすくとまっすぐ育ちますように」と祈願する人も少なくありません。その傍らに、室町時代から近代にかけて造立された117基の石造物が遺存されています。これほど多く遺存しているのは、市内でも稀であり貴重だそうです。



近松との縁



幻想的な椿に何を思う…
境内に群生する椿、散りゆく花が辺りを深紅に染めるその様は幻想的で美しい。幼少の頃、この寺の一角を借り住んでいたといわれる近松は、どんな思いでこの花を愛でたのでしょうか。



ツバキ

恋話

KAN BANA

花言葉 完全な愛、完璧な魅力、理想の恋

「あしひきの八重の椿つらつらに見とも飽かぬや 福点でける君」大伴家持見飽きることがあるでしょうか、この椿を植えたあなたを…椿は古事記にも登場する、神聖な樹木です。

※メッセージ「鏡の中の自分、見つめてみて」



近松の産湯伝説のある、千古の昔より湧き出る健康長寿の水

map ナンバー

12

榎お清水

えのきおしょうず



ひとやすみ



春慶寺本堂横の竹林の中の小径をほんの少し下って行くと、お泉水「榎お清水」のある山麓に出ます。ここは、千古の昔より湧き出ており、健康長寿の水として親しまれ、村人や旅人はお不動様の手を合わせ、お清水で喉を潤したといわれています。近松の時代、吉江藩主・松平昌親公は「榎お清水」を笏谷石で3つに仕切り、水飲み場と洗濯場を整備して村人の憩いの場とし、さらに吉江の城下町に水を引き入れるため木樋を敷設して上水道を整備しました。池の中心は三味線のバチの形をしています。



お不動様が見守るお清水
近松の時代から、廻れることなく今なお水を蒸えています。カルシウムやマグネシウムなどのミネラル分が豊富で、濃度の炭酸ガスを含んでいるまるやかで清涼感のある水は、平成22年「ふくいのおいしい水」に認定されました。市指定文化財にも指定されています。



近松との縁




近松少年が親しんだ水辺
お清水付近は「池泉広場」として整備されています。その裏の庭から時折、お清水が湧き出る様は、見ているだけで心落ち癒させてくれます。また、近くには蓮池や中置池があり、近松少年が親しんだ水辺の自然環境を再現しています。近松作品には、蓮の花が多く出てきます。この辺りで遊んだ当時を思い出して作品を描いたのでしょうか。



ここに
スタンプを
おしえてね！
その名の通り、この地で
物語BOXに
スタンプが
入っています。



榎お清水に咲く花々を
眺め楽しむことができます。



ハス

恋話

KOI BANANA

花言葉 愛情がけつん完、離命、静恋

中国の伝説。夏の深夜、月の仙女は下界の川面を鏡に化粧をしていた。その美しさに見惚れていた川の主の心に惹きつけられ、葉の象徴とされるかんざしをうっかり落としてしまう。川の主は急いで水面に浮上するが、川面には蓮の花が一面に咲き乱れ、持っていたかんざしも蓮の花びらに変わっていた。川の主は唇を返すことができます。恋は実らなかった。

***メッセージ「結果を求めすぎないで、まずは冷静に」**

江戸時代を代表する文豪 近松門左衛門

ちかまつもんざえもん

人形浄瑠璃や歌舞伎のすぐれた作品を数多く残した近松門左衛門(1653～1724)は、多感な少年時代、人間形成の大切な時期を鯖江で過ごしています。義理人情に悩む日本人の人間らしい姿を描き出す近松文学の土壌は、鯖江の豊かな自然と人情、風情に育まれたと言えるでしょう。「東洋のシェイクスピア」と呼ばれるほどに、人間の悲しさや悪かさ、やさしさを描いたその作品は360年を経た現在も愛され続けています。



近松門左衛門作風之像
(18) 林泉文庫蔵

鯖江市では「豊かな自然につつまれる魅力と、
人と歴史が見える「近松の里」づくりをテーマに、
住民と行政が一体となって、まちづくりを進めています。



「ちかもんくん」は、鯖江で少年時代を過ごした文豪近松門左衛門により親しみ、また近松文学に対する理解を深め、それをもとに「歴史を活かしたまちづくり」や「近松の情にふれあうまち鯖江」を広く内外にPRするための公募により決定。近松門左衛門の少年期をイメージして平成10年に誕生しました。



近松情報インフォメーション

鯖江市まなべの館 2F「近松の部屋」

〒916-0024 福井県鯖江市長泉寺町1-9-20 Tel.0778-53-2257

立待公民館 「近松の里めぐり情報館」

〒916-0005 福井県鯖江市杉本町702-2 Tel.0778-51-3376

近松会館 「近松情報案内所」

〒916-0024 福井県鯖江市吉江町15-77-7 ※無料レンタサイクルあります。

www.city.sabae.fukui.jp/index.html (鯖江市ホームページ)

近松の里づくり事業推進会議

〒916-0005 福井県鯖江市杉本町702-2(立待公民館内) Tel.0778-51-3376

■さばえ近松文学賞2014～恋話 (KOIBANA) ～ ■

平成26年10月3日 発行

近松の里づくり事業推進会議

〒916-0005 福井県鯖江市杉本町702-2 (立待公民館内)

TEL 0778-51-3376

【電子書籍版】

発行社 [DocCompany社](http://doccompany.jp)版 (ポポブックス) BoboBooks

東京都港区南青山2-2-15 ウィン青山14階

TEL 050-3692-4434 FAX 03-6369-4449

福井県福井市灯明寺1丁目30-1

TEL 0776-28-5233 FAX 0776-28-5234

<http://bobobooks.com>